

御 土 居 跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一六―一

御土居跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

御 土 居 跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をととして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、市営住宅建設に伴う御土居跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

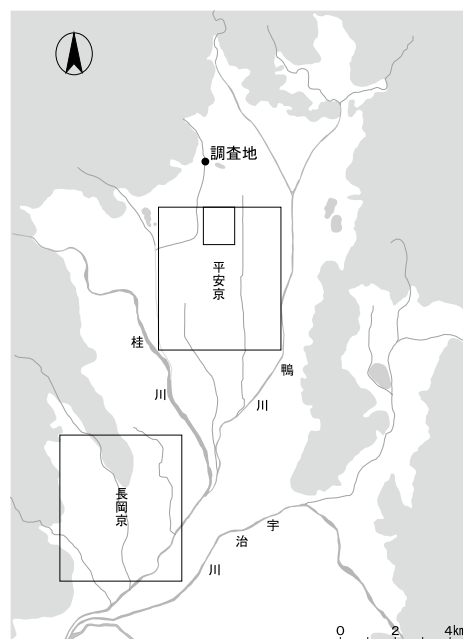
例 言

- | | | |
|----|-------|---|
| 1 | 遺 跡 名 | 御土居跡（文化財保護課番号 15 S 058） |
| 2 | 調査所在地 | 京都市北区紫野北花ノ坊町31番地 他 |
| 3 | 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 門川大作 |
| 4 | 調査期間 | 2016年9月1日～2016年12月5日 |
| 5 | 調査面積 | 1,161 m ² |
| 6 | 調査担当者 | 持田 透・関広尚世 |
| 7 | 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「原谷」・「鷹峯」を参考にし、作成した。 |
| 8 | 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 | 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 | 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 | 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種別を前に付した。 |
| 12 | 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。

遺物の時期は以下の文献を参考にした。小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究所紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年 |
| 13 | 本書作成 | 持田 透・関広尚世 |
| 14 | 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員がたった。また下記の方々にご指導いただいた。

岩崎奈緒子、植村善博、海邊博史、狭川真一、佐藤亜聖（敬称略） |

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 御土居の調査	5
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 遺 構	10
4. 遺 物	14
(1) 遺物の概要	14
(2) 土器類	14
(3) 鉄製品	14
(4) 石製品	15
5. ま と め	17
(1) 平安時代の葬送地	17
(2) 御土居の構築方法について	18
(3) 御土居に設けられた暗渠	20

図 版 目 次

図版 1	遺構	北区北壁・中央壁断面オルソ画像 (1 : 120)
図版 2	遺構	第 1 面平面図 (1 : 300)
図版 3	遺構	第 2 面平面図 (1 : 300)
図版 4	遺構	北区北壁断面図 (1 : 80)
図版 5	遺構	北区中央壁断面図 (1 : 120)
図版 6	遺構	南区北壁断面図 (1 : 60)
図版 7	遺構	南区南壁断面図 (1 : 60)
図版 8	遺構	拡張区・溝 3 実測図 (1 : 60)
図版 9	遺構	1 北区北半 第 1 面全景 (南から)
		2 北区北半 御土居 (堀・土塁) 全景 (南西から)

- 図版10 遺構 1 北区北半 御土居砂礫主体の盛土内集石5～7検出状況（北西から）
2 北区北半 御土居砂礫主体の盛土内集石8検出状況（西から）
- 図版11 遺構 1 北区北半 調査区北壁（南西から）
2 北区北半 第2面全景（北西から）
- 図版12 遺構 1 北区南半 第1面全景（北から）
2 北区南半 第2面全景（北から）
- 図版13 遺構 1 北区南半 中央断面（南西から）
2 北区南半 墓4（北から）
3 北区南半 墓4釘出土状況（南西から）
- 図版14 遺構 1 南区 第1面全景（北から）
2 南区 溝3（南西から）
3 南区 溝3断面（南西から）
- 図版15 遺構 1 南区 第2面全景（西から）
3 南区拡張区 溝3（西から）
- 図版16 遺物 墓4出土土器・鉄釘、シルト主体の盛土出土石塔

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	南区調査前状況（南西から）	2
図4	北区調査前状況（南東から）	2
図5	南区構造物解体作業風景（北から）	2
図6	北区遺構掘削作業風景（南から）	2
図7	調査地周辺の地形と地質（1：2,500）	3
図8	『京都惣曲輪御土居絵図』『下野道南』部分 元禄15年（1702）	4
図9	『京都市實地測量地図』明治35年（1902）	4
図10	『学区界町名入り京都市街図』昭和15年（1940）	4
図11	御土居調査地点位置図（1：40,000）	6
図12	北区中央壁断面図（1：100）	9
図13	集石5～8・段9～15・落込み16実測図（1：100）	11
図14	石塔出土状況（東から）	12

図15	墓4実測図（1：40）	13
図16	出土土器・鉄釘実測図（1：4、13のみ1：2）	14
図17	出土石塔実測図（1：4）	15
図18	平安時代後期の葬送地	17
図19	化野出土臓骨器実測図（1：4）	18
図20	北区北半砂礫主体の盛土土量比較図（1：200）	19
図21	溝3断面模式図（1：100）	21

表 目 次

表1	御土居調査一覧表	7
表2	遺構概要表	10
表3	遺物概要表	14
表4	土器一覧表	16
表5	鉄製品・石製品一覧表	16

御 土 居 跡

1. 調査経過

調査は、市営住宅建設に伴うものである。当地は、豊臣秀吉が天正19年（1591）に築いた御土居の推定地にあたり、建設工事に先立って京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課による試掘調査が行われた。その結果、御土居の盛土が残存していることが判明したため発掘調査が必要となり、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査が委託され、平成28年9月1日から調査を開始した。

調査地は東西方向の通路を挟んで北側（北区）と南側（南区）に分かれており、調査の都合上南区から調査を開始し、さらに排土置き場の関係から北区の南半分を並行して実施した。この過程において御土居の構築土の一部を現代層と誤認して掘削してしまった。この反省に基づいて、北区北半の調査では、御土居の構築状況を詳細に確認し調査に臨んだ。その結果、御土居の構築土が段丘上のみならず、段丘斜面にも盛られていることが確認できた。なお、調査は御土居の構築土上面すなわち御土居の調査を第1面とし、御土居の構築土を除去した面を第2面として調査した。そして第2面では平安時代の遺構、遺物を確認することができた。また、南区では御土居の土塁を貫通する暗渠を検出した。その性格を検討するために南区の東側に拡張区を設けて調査を行い、暗渠の延長部が開渠となっていることを確認した。検出した暗渠は重要遺構であると認識され、関係者で協議した結果、現状保存することとなった。このため、遺構上面に保護砂を入れ、H鋼を用いた土留め壁を設けて埋め戻しを行い、平成28年12月5日に終了した。

なお、平成28年11月12日に現地説明会を行った。

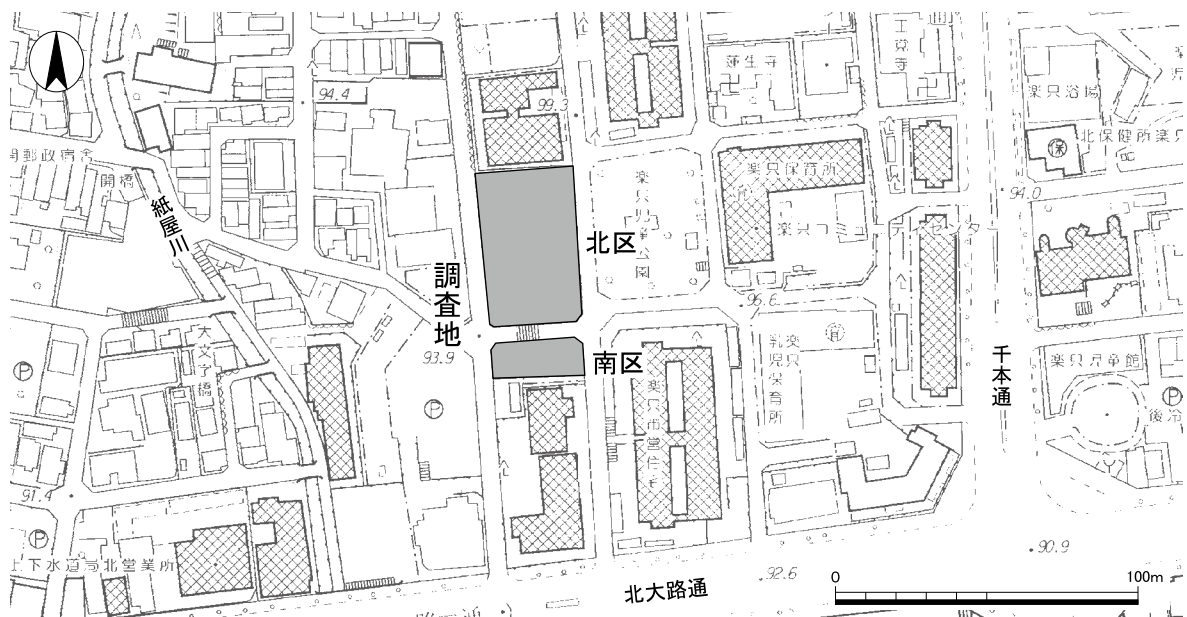


図1 調査地位置図（1：2,500）

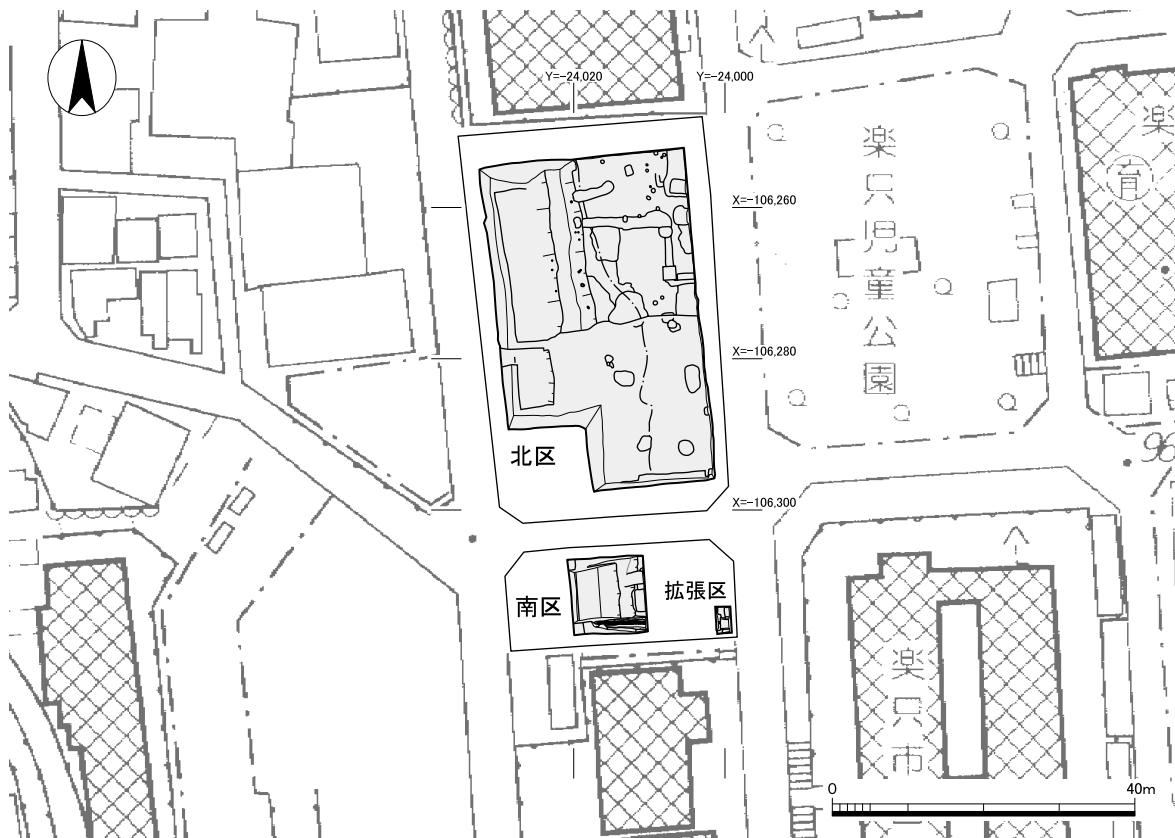


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)



図3 南区調査前状況 (南西から)



図4 北区調査前状況 (南東から)



図5 南区構造物解体作業風景 (北から)



図6 北区遺構掘削作業風景 (南から)

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地周辺は戸建ての住宅域であったが、住宅地区改良事業により区画整理が行われて共同住宅化した。また、公共施設や大学の教育施設も多い地域である。

調査地周辺は京都盆地の北縁で、かつ平均標高約700mの丹波高地の南縁部であるため、地形が急激に変化する地域である。調査地が位置する鷹峯台地は、高地の境から南東方向に約2km、幅約600mの範囲に広がり、平均斜度4%のこう配となっている。東側の傾斜に対し、西側は紙屋川（天神川）による河岸段丘を形成する。河岸段丘は高位段丘と低位段丘にわかれ、調査地のある高台は高位段丘面となり東西方向に対して急傾斜となり、現況で東西の高低差が約3mある。南北は北から南に向かって緩やかな下りこう配となっているが、調査地から南にかけて、さらに傾斜が強くなる¹⁾（図7）。このように調査地は河岸段丘の境に立地している。

平安時代では蓮台野とよばれる地域にあたり、平安京近郊において鳥辺野、化野とならぶ葬送の地とされている。周辺には平安期天皇の火葬塚（後冷泉天皇、近衛天皇、後一条天皇、三条天皇）が点在し、文献によると鎌倉時代までは葬送地として利用されていたことがわかる。調査地の東にある千本通は、葬送地の道としての性格の他にも、京の出入口のひとつである長坂口へと通じ、中

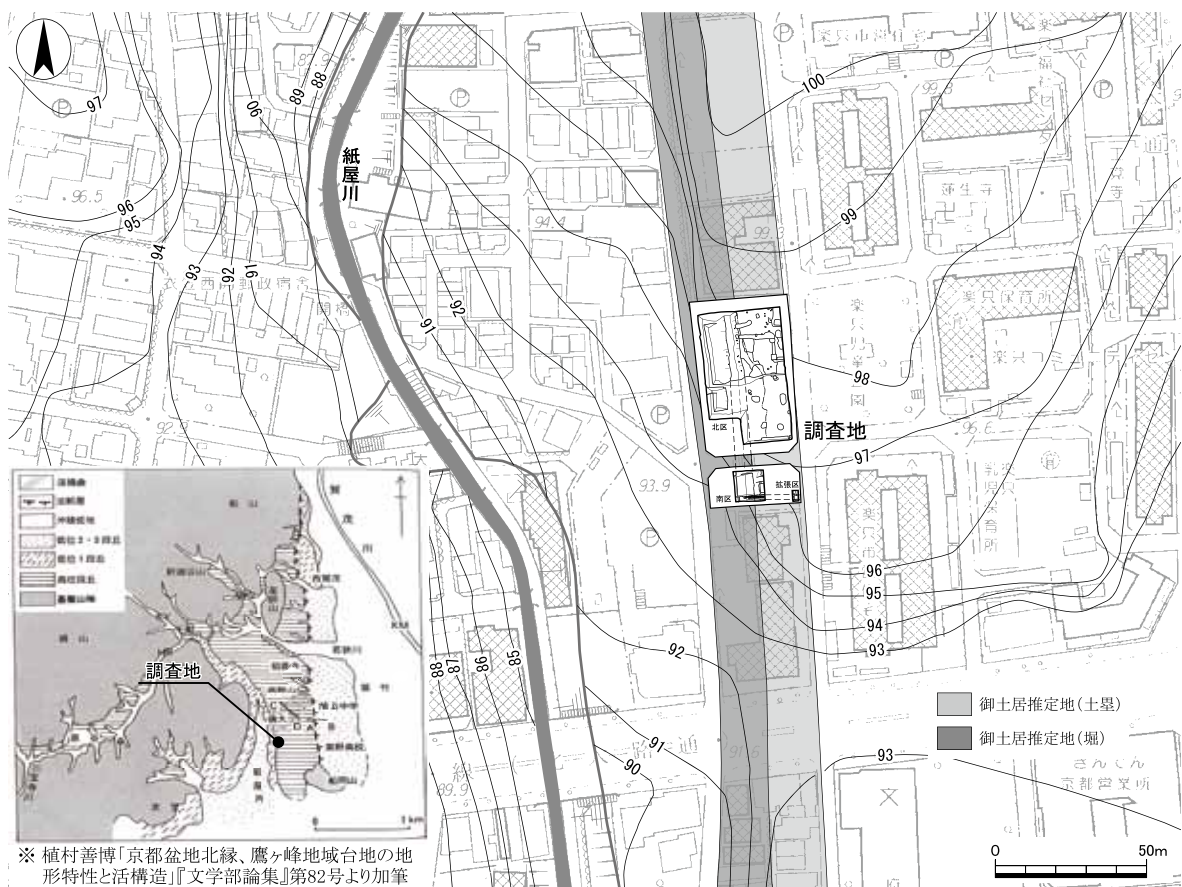


図7 調査地周辺の地形と地質（1：2,500）



図8 『京都惣曲輪御土居絵図』「下野道南」部分
元禄15年（1702） 京都大学総合博物館蔵



図9 『京都市實地測量地図』明治35年（1902）

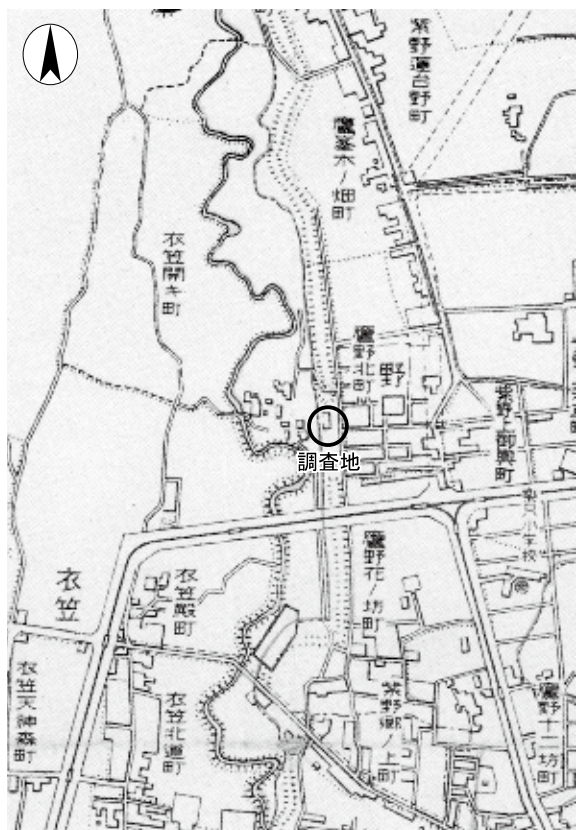


図10 『学区界町名入り京都市街図』昭和15年（1940）

近世以来の交通の要衝である。

近世初頭に至り、この地が御土居として選地される。御土居は天正19年（1591）に豊臣秀吉によって築かれ、堀と土塁によって構成される。東は鴨川、西は紙屋川、北は鷹峯、南は東寺に至る東西約3.5km、南北約8.5km、総延長22.5kmにわたり、上京・下京といった京の中心よりもさらに広い範囲を囲い、10箇所の出入口があったという³⁾（図11）。御土居の規模は高さ二～三間（3.6～5.4m）、土塁幅は十～十五間半（18～27.9m）、堀があるところで二～十間（3.6～18m）とされる⁴⁾。御土居の築造は秀吉が行った京都改造の一つで、御土居の築造目的は、京域を明示すること以外に外敵を防ぐことや賀茂川の治水対策など諸説ある。秀吉政権は奉行によって管理していたが、北野天満宮境内の土塁は築造直後に北野天満宮へ引き渡されているなど場所に依じて複雑な様相がある⁶⁾。江戸時代になると、総じて江戸幕府の管理下に置かれていたが、賀茂川右岸の土塁は賀茂川の治水工事（寛文新堤）や火災による敷地替えの影響などで、早くから土塁の取り壊しが始まり、跡地は民間への払い下げが行われた。なお、豪商角倉与一が江戸幕府から御土居の管理を任されていた時代に描かれた『京都惣曲輪御土居絵図』（京都大学総合博物館蔵）から往時の姿が窺え、このような構造物が近代まで京都を囲繞していたことになる（図8）。なお「御土居」という呼称が定着したとされるのが江戸時代で、築造当時は「土居堀」・「惣堀」・「京廻ノ堤」などと称されていた⁷⁾。

調査地は、御土居全体でみると北西隅付近にあたり、近隣には鷹峯土居町など地名として残っていることから御土居跡として古くから周知されていたが、昭和初期には周囲に先駆けて取り壊されて市街地化していた⁸⁾（図10）。また、近接する御土居跡もほとんどが調査されないまま開発が進み、わずかにその一部が昭和5年に史跡に指定、保存されている。

（2）御土居の調査（図11、表1）

調査地周辺の発掘調査は、ほとんど行われていない。御土居跡全体の発掘調査事例もさほど多くない。調査例をまとめると、図11・表1となる。発掘調査で検出した御土居跡は、大半が堀跡で（調査2～6・11・14・17・19）、土塁の検出は8例（調査3・9・10・13～16・18）あるが、残存状態の良好な例は1例（調査3）のみである。土塁の構築方法が判明できた調査（調査9・18）では土塁の核となる小山をつくり、御土居の内側から外側へ盛土していったとされる⁹⁾。堀の規模は幅17～20m、深さは1～2.5mで、中・近世の遺物を伴って近代までに埋没したことが多い。土塁の規模は幅20mで、高さは2m残存するものが最大である。大正時代の横断測量（調査1）では、土塁の高さが4.7mを測るとされ、測量箇所は御土居のなかでも丘陵地である北側に位置する場所に相当するため、平地の立地と安易に比較できないが、記録に残るものとしては最も高い土塁である。

土塁と堀が伴に残存している箇所は、史跡保存されているなかでも丘陵地に位置するわずかな部分であるが、この部分の土塁の構築方法がわかる調査例はほとんどない。そのため今回の調査では、丘陵地での御土居の構造や土塁の構築方法の解明が期待された。

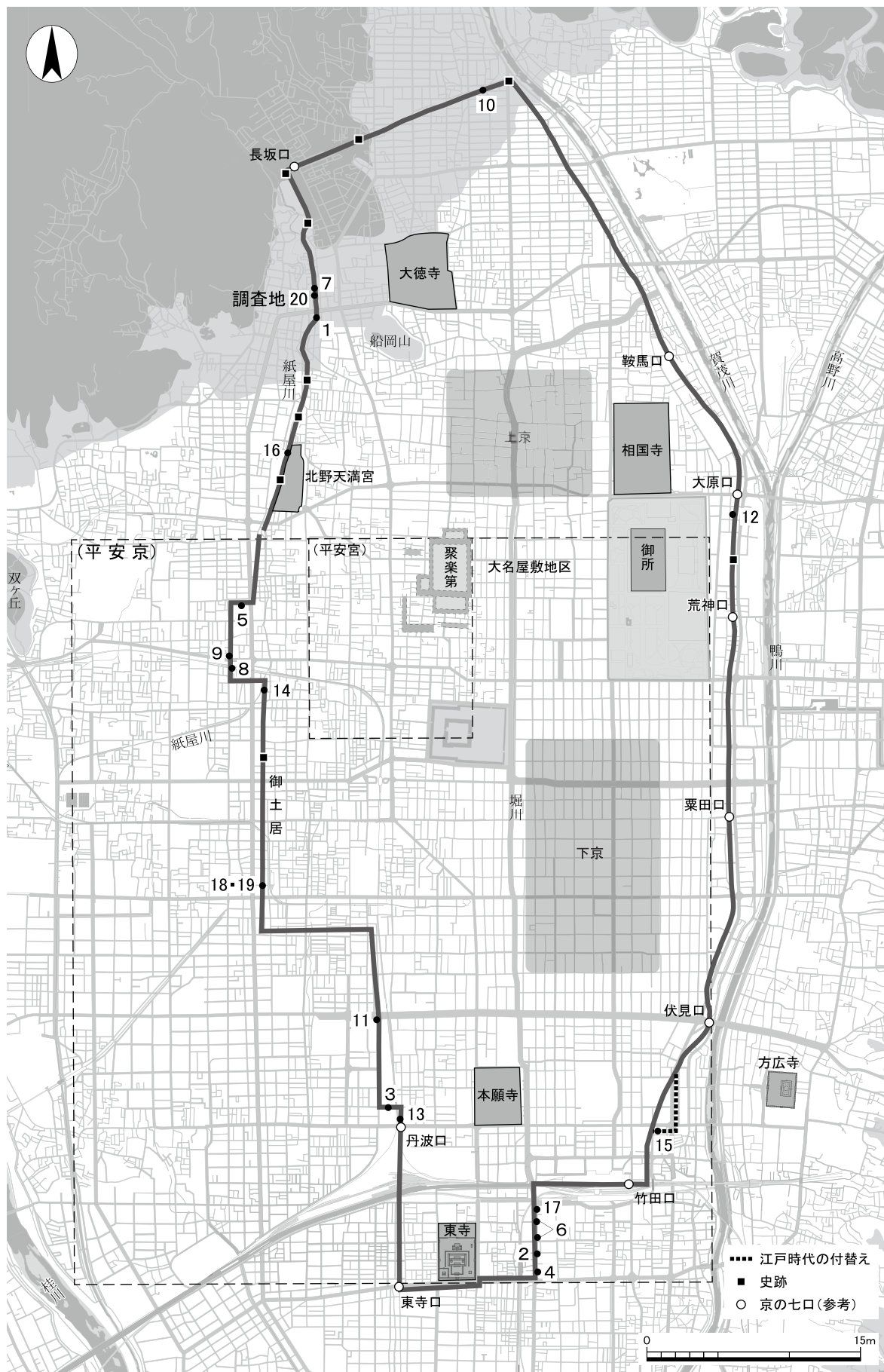


図11 御土居調査地点位置図 (1 : 40,000)

表1 御土居調査一覧表

No.	調査地	調査期間	調査概要	出土遺物	文献
1	北区衣笠荒見町 (旧野口町)	1918年	土塁を測量。		西田直二郎・梅原未治「御土居」『京都府史蹟勝地調査会報告 第2冊』京都府 1920年
2	南区西九条春日町13 (九条弘道小学校)	1980.09.16～ 1980.10.09	堀を検出。 幅17.5m、深さ2m。	文楽人形など大量の木製品と共に6体分人骨が出土。	「平安京左京九条二坊十三町」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
3	下京区朱雀堂ノ口町	1982.01.27～ 1982.10.15	土塁と堀を検出。 土塁は幅20m、高さ2m。 堀は幅20m、深さ2m。		平田 泰ほか「右京七条一坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
4	南区西九条春日町19	1984.05.21～ 1984.10.01		「天正十三年」(1585)、「慶長□□□」、「甲午 承應」(1654)、「寛文九年」(1669)、「延カ宝三年」(1675)の記年銘木簡、キリシタン関係の木簡が出土。	丸川義広ほか「平安京左京九条二坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
5	中京区西ノ京中保町1-4 (北野中学校)	1987.10.08～ 1987.11.30	堀を検出。 幅は5m以上、深さ1m。		菅田 薫「平安京右京一条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
6	南区西九条鳥居口町1	1991.05.01～ 1991.10.17、 1991.11.05～ 1992.03.31	堀を検出。 幅14m以上、深さ2.5m。	「□保四年八月中」、「正保四□八月□」(1647)など多数の木簡が出土。	菅田 薫「平安京左京九条二坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
7	北区鷹峯旧土居町	1995.04.25～ 1995.05.18	遺構は確認されていない。		門田誠一「土城としての御土居」『文学部論集』第83号 1996年
8	中京区西ノ京円町地内	1997.09.08～ 1998.02.13	土塁内溝を検出。 幅1.7m、深さ0.3m。		小檜山一良ほか「平安宮左馬寮一朝堂院跡・平安京右京一・二条二～四坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
9	中京区西ノ京円町55-1	1999.11.01～ 2000.03.25	土塁基底部と内溝を検出。 基底部は幅13～14m。内溝は幅2.0m、深さ0.4m。		小森俊寛ほか「平安京右京一条二坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
10	北区紫竹上堀川町	2000.02.14	土塁基底部を北端を検出。		『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
11	下京区中堂寺南町	2001.01.18～ 2001.04.06	堀を検出。 幅12.5m、深さ1.5m。	17世紀後半の陶磁器、寛永通寶20数枚が出土。	平尾政幸ほか『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6 2002年
12	上京区御車道今出川下二丁目栄町361	2008.02.25	土塁内溝を検出。 幅1.6m以上、深さ0.6m。		馬瀬智光「御土居跡・寺町旧域」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
13	下京区朱雀正会町1-20	2009.03.09～ 2009.04.30	土塁基底部の一部を検出。		小檜山一良『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-1 2009年
14	中京区西ノ京笠殿町38	2012.05.09～ 2012.09.07	土塁基底部・犬走・堀を検出。 堀幅14m以上、深さ2m。		高橋 潔ほか『平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-25 2012年
15	下京区小稲荷町22-2ほか	2013.04.15～ 2013.08.12	17世紀前半に付け替えられた土塁と土塁外側の排水路を検出。幅4m以上。		近藤章子『平安京左京八条四坊八町跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-11 2014年
16	上京区馬喰町・北町	2013.06.03～ 2013.08.09	土塁と石組暗渠を検出。 土塁は幅約17m。 暗渠長は19.3m。		南 孝雄「御土居の実像」京都市考古資料館文化財講座第257回 2014年
17	南区西九条北ノ内町6・7・8-1	2014.05.21～ 2014.09.26	堀を検出。 幅8.5m以上、深さ0.75m、 南北長45mを検出。	17世紀前半～19世紀の陶磁器類、木製品が出土。	松吉祐希ほか『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-9 2015年
18	中京区壬生淵田町7・8	2013.11.29～ 2013.12.02、 2014.09.01～ 2014.09.19	土塁基底部を検出。 幅20m以上、高さ1m。		鈴木久史「平安京右京四条二坊十一町跡・壬生遺跡・御土居跡(13H408)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
19	中京区壬生淵田町7・8	2015.01.21～ 2015.04.30	堀を検出。 幅6m以上、深さ1.7m以上。		布川豊治ほか『平安京右京四条二坊十一町・西堀川小路跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-1 2015年
20	北区紫野北花ノ坊町31	2016.09.01～ 2016.12.02	今回の調査。		

註

- 1) 植村善博「京都盆地北縁、鷹ヶ峰地域台地の地形特性と活構造」『文学部論集』第82号 佛教大学 1998年
- 2) 西行法師(1118-1190)の歌「露と消えば 蓮台野に 送りおけ 願う心を 名にあらはさむ」にあるように鎌倉時代には葬送地として認知されていることがわかる。
- 3) 秀吉時代の十口の出入口は特定されていないが、一般に知られる京の七口が含まれていると考えられる。なお鎌倉時代から「口」の記録が見られ、時代とともに様々な「口」が関所として存在し、江戸時代には40箇所以上の出入り口があったとされる。
- 4) 「御土居」『京都市の地名 日本歴史地名大系第27巻』平凡社 1979年
- 5) 天正14年から19年に豊臣秀吉が京都で行った、区画整理と新築事業。天正13年(1585)に関白となった秀吉は、天正14年(1586)に聚楽第の造営を行う。次いで天正16年(1588)に方広寺大仏殿の着工に入る。天正18年(1590)には平安京以来の正方形地割を長方形に分割し新たな道を設けた(天正地割)。天正19年(1591)閏一月から始まった御土居の築造は、当時の記録から3箇月程度でほぼ完成したといい、同年、寺町・公家町の整備も行った。(『三猿院記』『時慶卿記』)
- 6) 土塁には広く竹が植えられ公儀のものとされ、払い下げられた北野天満宮の土塁に植えられた竹に関しては公儀とされ伐採の自由はなかった。藤井譲治・中井均・南孝雄『御土居の実像-豊臣から徳川へ-』公益社団法人京都市埋蔵文化財研究所設立40周年記念講演会資料 2016年
- 7) 中村武生『御土居ものがたり』京都新聞出版センター 2005年
- 8) 「学区界町名入り京都市街図」昭和15年(1940)(図10)では土塁が明確に記されている。明治政府は御土居を公有林として江戸幕府から引き継ぎ管理していたが、明治3年に耕作地としての利用を奨励して民間へ土地を分割して払下げを行った。大正9年(1920)に施行された都市計画法によって都市開発が進み、開発の弊害となる御土居の破壊が奨励された。
- 9) 丸川義広「御土居跡の発掘調査とその成果」『日本史研究』420号 1997年、
鈴木久史「御土居跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年

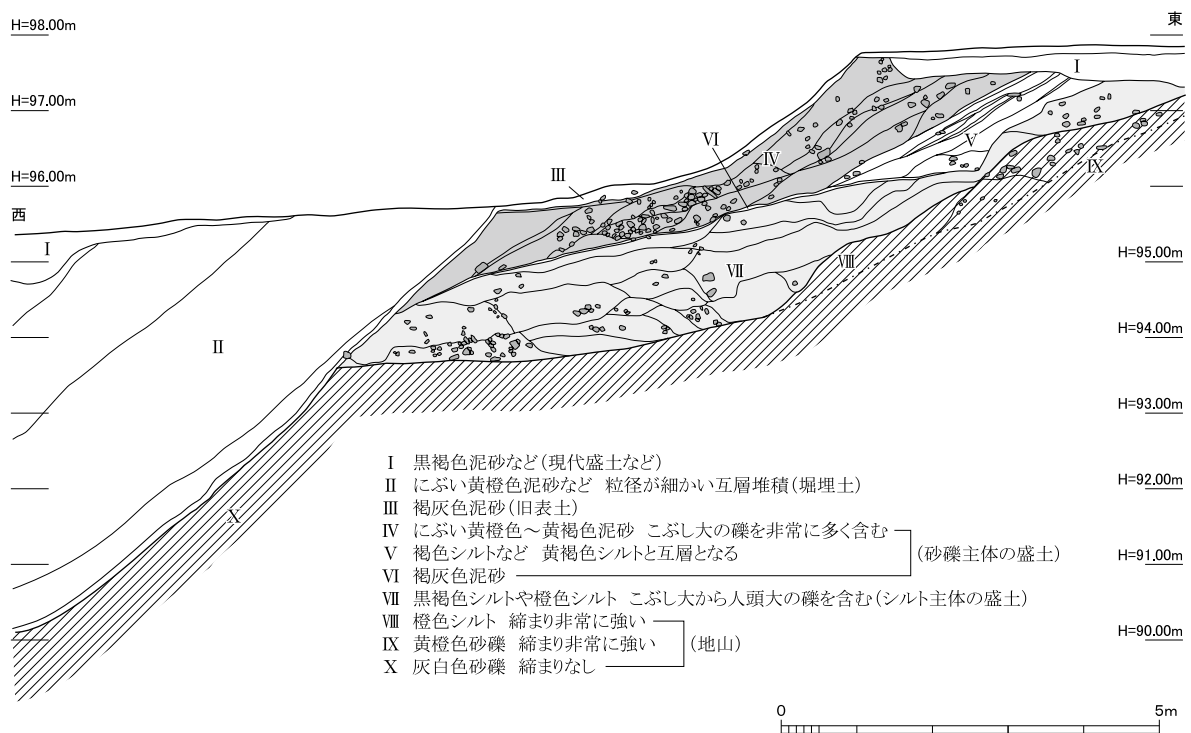
3. 遺 構

(1) 基本層序 (図12)

調査地は東西のほぼ中央に段差があり、東が西に比して2～3m高く、東側の高位は宅地開発により地山まで削り取られている。調査地は南北に伸びる舌状の高位段丘上に位置することから、西斜面の傾斜は、北側が強く、南にいくにつれて緩やかになる。

段丘を形成する地層は、低位から灰白色砂礫層 (図12 - X層)、橙色シルト層 (図12 - VIII層)、黄橙色砂礫層 (図12 - IX層) である。自然地形の上には、土塁の構築土である黒褐色シルトと橙色シルトが大きなブロック単位で互層となったシルト主体の層 (図12 - VII層) が傾斜地に約1.4m積み、シルト主体の層の上面には、2～3cm厚の褐灰色泥砂層 (図12 - VI層)、砂礫を含んだにぶい黄橙色～黄褐色泥砂層 (図12 - IV層) が約0.6m積みされている。これらの層を旧表土と考えられる層厚1～3cmの褐灰色泥砂層 (図12 - III層) が覆う。調査区西端は、堀の埋土である粒径の小さいにぶい黄橙色泥砂層など (図12 - II層) が厚く堆積している。

旧表土を取り除いた段階が御土居にあたり、第1面 (安土桃山時代) とした。土塁の構築土である砂礫とシルトを主体とした盛土を除去した自然地形直上で墓を検出しており、第2面 (平安時代) とした。



(2) 遺 構

第1面で検出した遺構は、安土桃山時代に築造された御土居を構成する堀、犬走、土塁基底部である。土塁上部は近代以降の開発により削平されていた。また、土塁の下を横断する石詰暗渠を南区南端で検出した。第2面とした自然地形上で検出した遺構は平安時代の墓である。

第1面の遺構（図版2・9・12・14）

土塁1（図版2・9） 北区・南区ともに検出した。検出長は北区が43m、南区が9.8mで、主軸方向は北に対して西に約6°傾く。土塁上部（調査区東側）は削平され消失している。そのうち堀と土塁の間に設けられた犬走部分の幅は1.9～2.5mである。犬走部は南側に傾斜する緩斜面である。犬走から土塁の上部に向かう傾斜角は約40°である。

自然地形の高台の際が南側にいくにつれて東側に偏るため（図版3）、南北一直線の土塁を築造するためには調査地のなかでは、北側に比べて南側により多くの盛土が必要となる。シルト主体の盛土（Ⅶ層）は南北を通して認められるが、砂礫主体の盛土（Ⅳ～Ⅵ層）は北区北壁ではほとんど見られないのに対し、南区南壁では厚く広く積まれている。シルト主体の盛土は、黒褐色シルトと橙色シルトで構成され、灰白色砂礫を多く含んだ黒褐色シルトを最下位にして黒褐色シルト、橙色シルト、褐灰色シルトの互層堆積となる。砂礫主体の盛土中には、こぶし大から人頭大の礫が多く含まれる。また、礫をほとんど含まない土で互層に盛土した部分（Ⅴ層）がある（図版5-28～34、図版6-16、図版7-16～18）。土塁表面は化粧土で仕上がりを整えている（図版4-12～15、図版5-12、図版7-11）。

土塁の盛土構築を平面的にみると、まずシルト主体の盛土を北側から南側の傾斜に合わせて階段状（図13-段9～15）に成形してから砂礫主体の盛土を構築している。砂礫主体の盛土中には、土塁を横断する集石列が確認できる（図13-集石5・6・8）。詳細は後述する。これらの遺構群は構築単位を表していると考えられる。

砂礫主体の盛土中から土器片や青磁碗片が出土した。年代は15世紀後半で、室町時代の遺物が混入したものと考えられる。シルト主体の盛土の最上層（図版7-21）からは石塔が出土した（図14）。掘り込みなどの痕跡は確認できず、盛土に混入したものと考えられる。年代は平安時代後期から鎌倉時代と考えられる。

階段状の造成と集石（図13、図版10） 土塁盛土の上層である砂礫主体の盛土（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層）を除去し、下層であるシルト主体の盛土（Ⅶ層）の上面の状態を観察すると、層の上面が地形の傾

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	墓4	
安土桃山時代 （江戸時代）	御土居（土塁1、堀2、集石5～8、段9～15、落込み16）、 溝3（石詰暗渠）	土塁1は土塁基底部と 犬走を含む

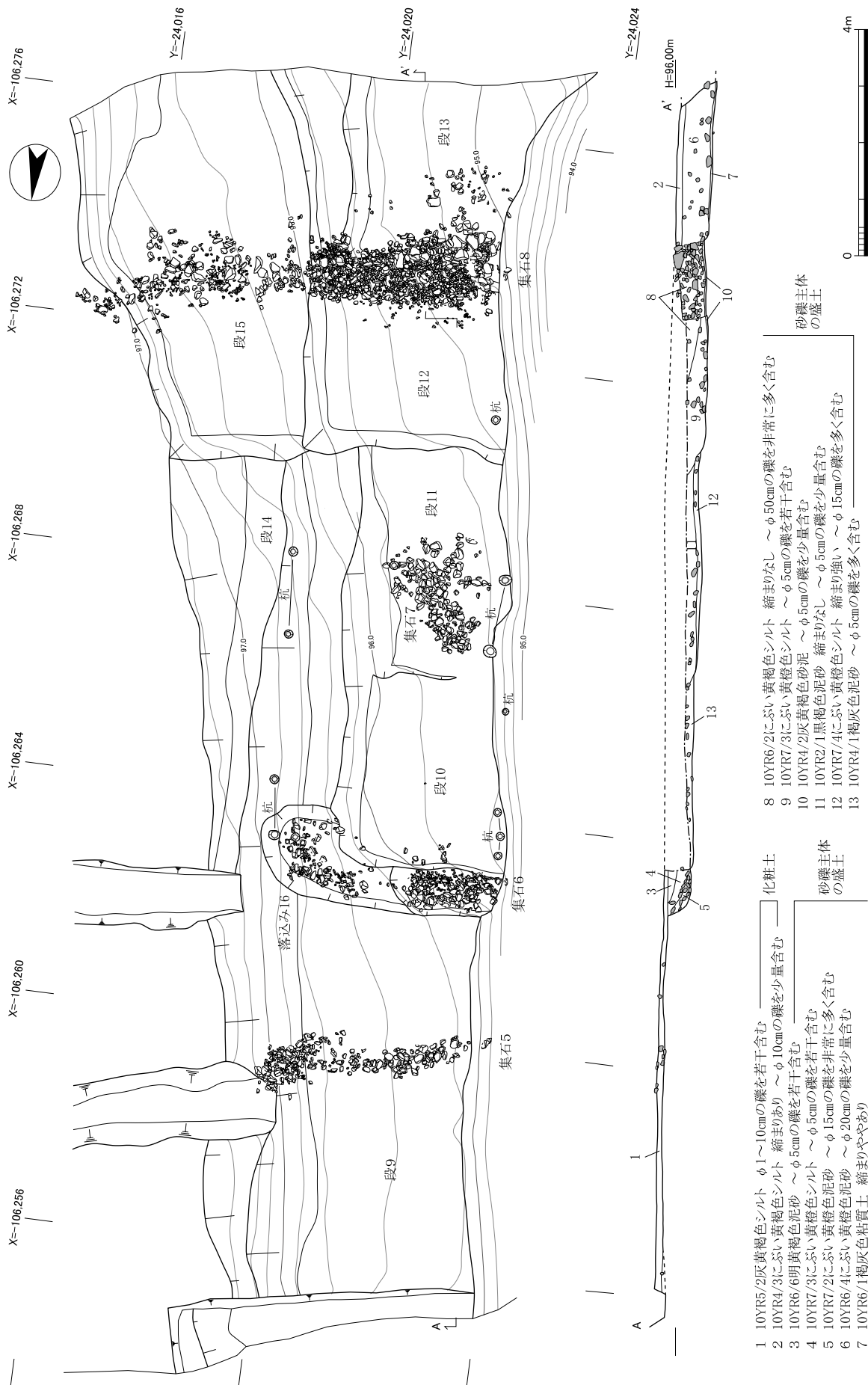


図13 集石5~8・段9~15・落込み16実測図 (1:100)



図14 石塔出土状況（東から）

斜に沿って階段状に整形されていることがわかる。すなわち、西と南の傾斜に対して階段状に盛土を行い、小規模な平坦面を整えながら、ひな壇上に仕上げていった状況が確認できる（図13）。これらはシルト主体の盛土（Ⅶ層）の構築単位に関連しているとみられる。また、それらの上面にみられる集石は、次に盛られる砂礫主体の盛土の単位の目安として設置されたものと考えられる。さらに、段10

～12の西端と段14から西に下がった法面に杭穴が確認できるが、これらは砂礫主体の盛土を造成する単位を示す土留めであると考えられる。

段9・集石5（図13、図版10） 段9は層厚0.10mの化粧土を除去すると現れる南北7.2m、東西3.0mの段である。底面の標高は96.00～96.42mである。調査区北端から4.5mの位置に集石5がある。集石5はこぶし大の亜角礫の集石列で、犬走から土塁基底部の盛土にかけて南北0.51～0.70m、東西3.75mにまとまる。集石の厚みは最大で0.20mで、上面が化粧土であるシルト層に覆われている。集石5から青磁椀が出土した。

落込み16・集石6（図13、図版10） 落込み16は南北1.63m、東西4.55mの長楕円形土坑で、段9に北接し、集石5の中心から南へ3.3mに位置する。底面付近にこぶし大の亜角礫が西に傾斜して南北1.05m、東西3.94mの範囲まとまっている（集石6）。集石の厚みは最大で0.15mである。

段10（図13） 層厚0.10mの化粧土を除去し、厚さ約0.5mの砂礫主体の盛土を除去すると現れる長方形段で、南北3.36m、東西2.54～2.95mである。段の西端で直径0.15～0.18mの杭穴を3基検出した。底面の標高は95.60～96.10mである。段10から遺物の出土はない。

段11・集石7（図13、図版10） 段11は段10に南接する、南北4.02m、東西2.02～2.48mの長方形段である。底面の標高は95.55～95.80mである。段の中央付近にこぶし大から人頭大の亜角礫が集中する（集石7）。集石は段の底面に広がる。集石7はこぶし大の亜角礫の集石で、1.5～1.8mの範囲に広がる。集石の厚みは最大で0.20mで、北側から南側にかけてわずかに傾斜している。段の西端に直径0.18～0.22m、深さ0.22mの杭穴を2基検出した。段11から遺物の出土はない。

段12・集石8（図13、図版10） 段12は段11に南接する、南北3.02m、東西3.38～3.60mの長方形段である。段の西端に直径0.20mの杭穴が1基ある。底面の標高は95.20～95.90mである。段12の南端付近にこぶし大から人頭大を超える亜角礫を集石している（集石8）。集石の範囲は南北に約1.2m、東西に7.2mで、東の段15まで及ぶ。段底面から積み上げられたと考えられる。段12から遺物の出土はない。

段13（図13） 段12に南接する、南北3.35m、東西2.76～3.20mの長方形段である。西端にかけて傾斜する箇所がある。底面の標高は94.16～95.55mである。段13から遺物の出土はない。

段14（図13） 段10・11よりも東側に1段高い位置にある段である。南北7.35m、東西0.45～

0.65 mの細長い段である。西端の斜面部に直径0.16～0.18 mの円形杭穴が4基確認できる。底面の標高は96.40～97.30 mである。段14から遺物の出土はない。

段15(図13) 段14に南接する、南北3.62 m、東西2.52～3.62 mのいびつな長方形段である。段12で検出した集石8を段15の中央付近で検出した。段15から遺物の出土はない。

堀2(図版2・9) 北区で検出した、検出幅8.6 m、検出長約33 m、深さ5.7 mの御土居の堀である。堀底から残存する土塁基底部の上端までの比高差は7.6 mである。検出した堀の東肩傾斜角は44°である。堀の埋土は粒径の小さいにぶい黄橙色泥砂などが土塁側(東側)から小単位に流れるように堆積している。土質から判断すると土塁構築土に類似することから、少しずつ土塁を壊しながら堀に流し埋めた状況であると判断できる。埋土からは陶磁器や不明鉄製品が出土した。なお、南区の壁面西端でも堀の埋土と考えられる堆積を確認した。出土した遺物は近代のもので、この時期までこの堀は開口していたと考えられる。

溝3(図版2・8・14・15) 南区南端で、御土居盛土上面で検出した幅1.55 m、検出長7.0 mの溝である。検出高からの深さは0.94 mで、西側に緩やかに傾斜する。さらに、溝底から0.20～0.25 mの厚さで底を埋め戻し、溝の中心に幅0.40 m、深さ0.75 mの溝を掘り、こぶし大の礫を詰め込んだ石詰暗渠としている。石詰暗渠は犬走部にも続いていた。東側は拡張区の調査で検出した溝が同一のものと考えられるが、溝中央には石詰暗渠がなく、開渠となっていたと考えられる。西側の溝3と同様に溝底を整地し、0.05～0.10 m床を貼っている。石詰暗渠部分からは古瀬戸の小壺や銅滓片、磁器細片が出土したが、15世紀後半の遺物の混入である。なお、堆積を確認するために石詰暗渠の東端の一部を掘り抜いたが、遺構保存のために他の部分は掘削を行っていない。溝3の時期は確定できないが、盛土構築後である。

第2面の遺構(図版3・11・12・15)

墓4(図15、図版3・13) 北区中央で検出した長さ2.5 m、検出長0.30 m、深さ0.25 mの長方形土坑で、御土居構築時に大きく壊されたと考えられる。床面には貼床が一部残存していた。床面からは鉄釘2本が南北方向に並んで出土した。北東隅に10枚以上の土師器皿がまとまっていた。また、床面の南側で炭化物片が出土した。

土坑の北に偏在する土師器皿の出土状況と、鉄釘が床面で出土することと合わせ長大な掘形をもつ遺構の性格は木棺が据えられた木棺墓であると考えられる。

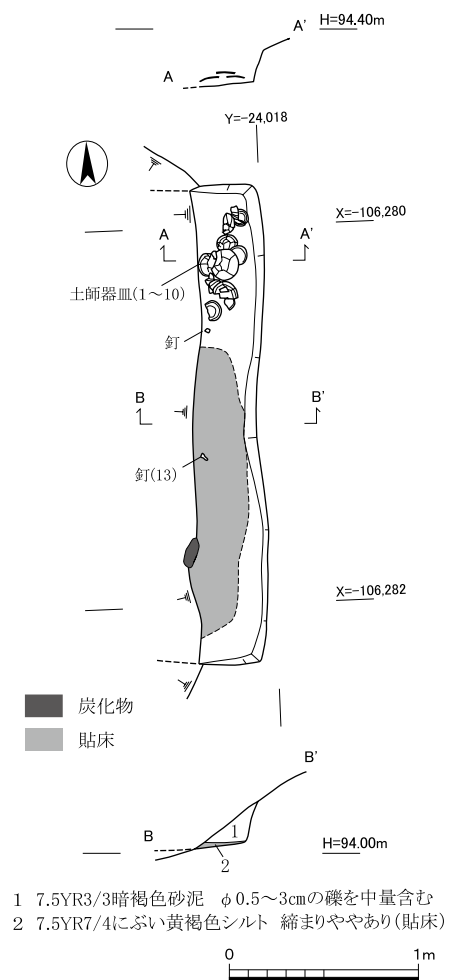


図15 墓4実測図(1:40)

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

平安時代末から室町時代にかけての遺物が2箱出土した。内容は土器類、金属製品、石製品である。大半は土器類で、平安時代の墓4から出土した。

(2) 土器類 (図16、図版16、表4)

1～10は土師器皿である。1～7は皿Aで、口径9.6～10.3cm、器高1.4～1.8cmである。焼成は良好で胎土は密であり、色調は浅黄橙色を呈する。8～10は皿Nである。口縁端部は二段ナデを施す。8は口径10.1cm、器高1.8cm、焼成は良好で、胎土は密であり、色調は淡黄色を呈する。9・10は口径14.6～14.8cm、器高2.7～2.9cmである。焼成は良好で、胎土は密であり、色調はにぶい黄橙色である。1～10は墓4からまとまって出土した。時期は京都V期古段階（11世紀末から12世紀初頭）である。

11は龍泉窯の青磁碗である。底径5.4cmで、焼成は不良、釉調は不鮮明で外面には微小な凹凸が目立つ。高台部は無釉である。12は古瀬戸小壺である。口頸部は欠損しており、最大径5.0cm、残存高5.5cmである。焼成は硬緻で肩部から胴部にかけて自然釉がかかる。11は御土居盛土、12は溝3から出土した。11・12の時期は15世紀後半である。

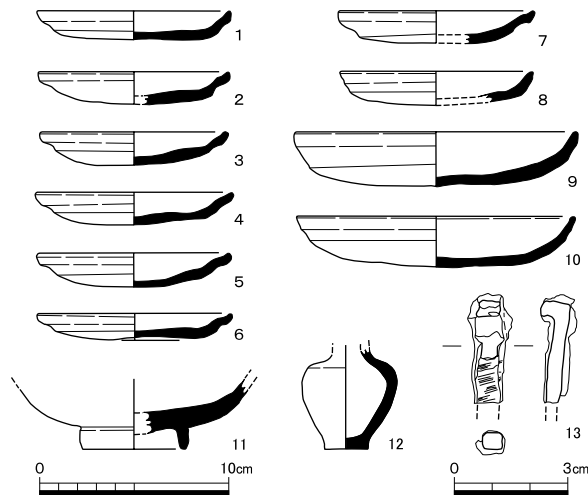


図16 出土土器・鉄釘実測図（1：4、13のみ1：2）

(3) 鉄製品 (図16、図版16、表5)

13は折曲頭釘である。木質が残存している。残存長2.7cm、幅0.8cm、重さ3.1gである。墓4から出土した。釘はもう1点出土しているが、腐食が著しく図示できなかった。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代	土師器、金属製品、石製品		土師器10点、鉄釘1点、石塔1点		
室町時代	瓦質土器、施釉陶器、輸入陶磁器		施釉陶器1点、輸入青磁1点		
合 計		2箱	14点（2箱）	0箱	0箱

(4) 石製品 (図17、図版16、表5)

14は石塔である。梵字（キリーク：阿弥陀如来）を正面1面のみに非常に丁寧に陽刻している。石塔の上下は節理に沿って欠損し、両側面は欠損していると考えられる。石材は凝灰岩で、色調は極めて白い。2～5mmの黑色ガラスを中量含んでおり、東讃岐で産出される^{ひやまいし}火山石と考えられる。残存長29.0cm、残存幅14.0cm、厚さ13.7cmである。南区でシルト主体の盛土の最上層から出土した。

残存している月輪の輪郭を復元すると直径13cm程度となる。石塔は14cmの角柱状であるため、月輪は石塔幅いっぱいに配置されていたと考えられる。また梵字の位置が月輪に対してやや右に偏在している。上下が欠損しているため不明確であるが、笠塔婆である可能性が考えられる。梵字の表現が非常に丁寧なことを考慮すると、平安時代後期から鎌倉時代の遺物と考えられる。

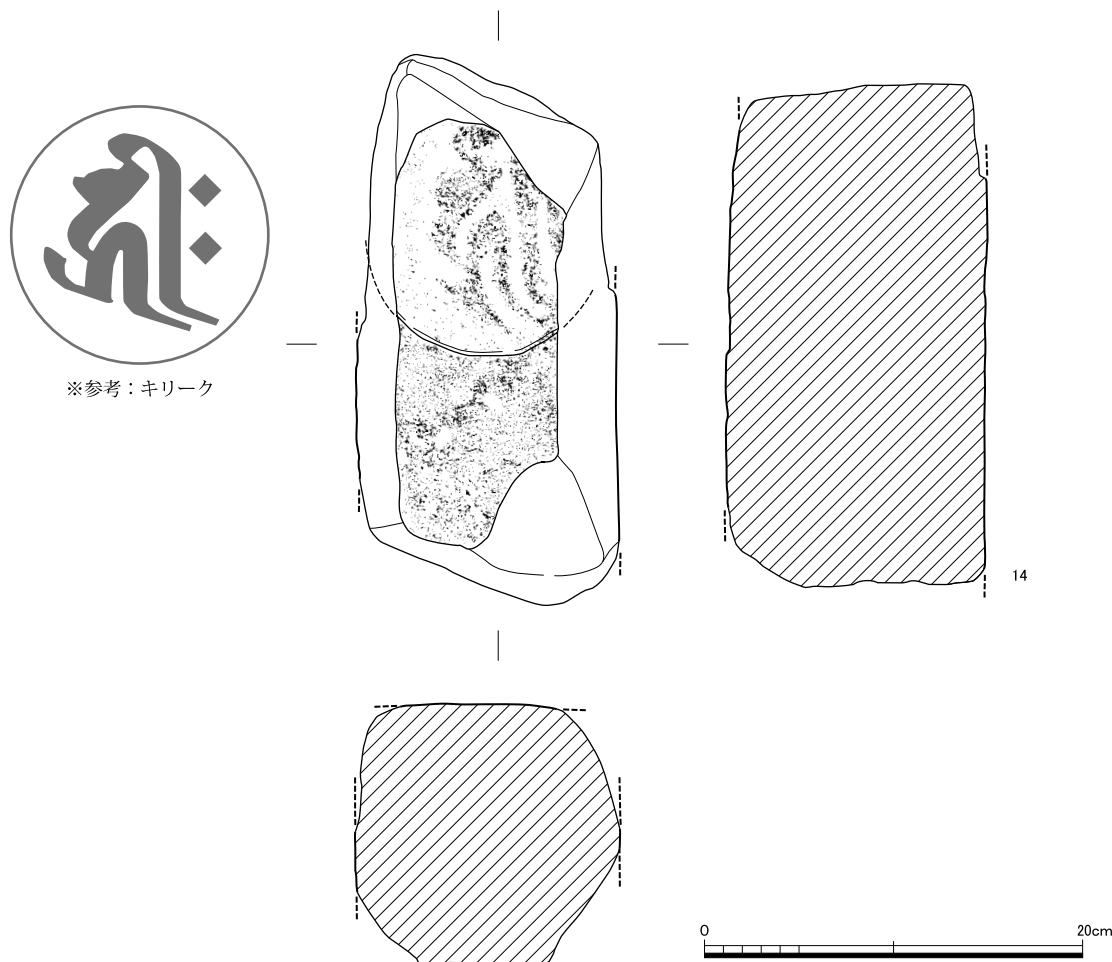


図17 出土石塔実測図 (1 : 4)

表4 土器類一覧表

No.	器種	器形	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・色調・焼成・特徴	備考
1	土師器	皿	墓4	10.2	1.6	—	胎土密、長石、チャート、石英、雲母含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良好	
2	土師器	皿	墓4	10.0	1.8	—	胎土密、長石、チャート、石英、雲母含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良好	
3	土師器	皿	墓4	9.6	1.8	—	胎土密、長石、チャート、石英、雲母含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良好	
4	土師器	皿	墓4	10.3	1.7	—	胎土密、長石、チャート、石英、雲母少量含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良好	
5	土師器	皿	墓4	10.2	1.8	—	胎土密、長石、チャート、石英、雲母少量含む、10YR8/4浅黄橙色、焼成良好	
6	土師器	皿	墓4	10.2	1.4	—	胎土密、長石、チャート、石英、雲母微量含む、10YR8/4浅黄橙色、焼成良好	
7	土師器	皿	墓4	10.2	1.7	—	胎土密、長石、チャート、石英、雲母少量含む、10YR8/3浅黄橙色、焼成良好	
8	土師器	皿	墓4	10.1	1.8	—	胎土密、長石、チャート、石英、雲母少量含む、2.5Y8/3淡黄色、焼成良好	
9	土師器	皿	墓4	14.8	2.9	—	胎土密、長石、チャート、石英、雲母含む、10YR7/4にぶい黄橙色、焼成良好、二段ナデ	
10	土師器	皿	墓4	14.6	2.7	—	胎土密、長石、チャート、石英、雲母少量含む、10YR7/3にぶい黄橙色、焼成良好、二段ナデ	
11	輸入青磁	碗	御土居盛土 集石5	—	(3.7)	5.4	胎土密、5Y7/3浅黄色、焼成不良、釉調不良	
12	施釉陶器	小壺	溝3	—	(5.5)	2.4	胎土密、長石少量含む、5Y7/1灰白色、焼成良好、自然釉が全体にかかる、底面ヘラ切	古瀬戸

表5 鉄製品・石製品一覧表

No.	器種	種類	遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	特徴	備考
13	鉄製品	釘	墓4	(2.7)	0.8	0.8	折曲頭、木質残る	
14	石製品	石塔	御土居盛土	(29.0)	14.0	13.7	梵字(キリク)を陽刻、10YR7/1灰白色、上下を欠損	笠塔婆

5. ま と め

(1) 平安時代の葬送地

調査地は、平安時代には蓮台野と呼ばれる^{とりべの}鳥辺野、^{あだしの}化野と並ぶ葬送地であった。蓮台野は船岡山の西から紙屋川に至る一帯の地名で、洛北七野にも数えられる狩猟地でもある。蓮台野の地名は、平安時代中期の僧恵心僧都の弟子定覚上人が、この地で「三昧をおこなったところ、蓮華化生したところから蓮台野」と呼ばれるようになり、「一切の人の墓所」となったとされる¹⁾。

平安京域の墓地は『律令』に定められた「喪葬令」によって規制されたため、京周辺が葬送地とされた(図18)。平安時代の墓制は、葬送地を立地環境から「在地系集団葬地・墓地」と「非在地系都市民の葬地・墓地」に分かれ、時代の経過とともに様々な変化を遂げ複雑化しているとされる²⁾。

蓮台野での葬制がわかる検出例は管見がなく、今回検出した墓4が初出となる。墓4は釘の出土位置や土坑の形状から木棺墓と推定できる。墓4は一部が残存するのみで全様は不明であるが、平安京の木棺墓の諸例(右京三条三坊十町跡例³⁾、右京五条二坊五町跡例⁴⁾)と比較すると、被葬者の北側に土師器皿群などを配置する葬制が共通している。墓4が設けられた場所は、鷹峯台地の丘陵裾で、西に紙屋川が望める緩斜面に位置する。また、墓4の長軸方向は北を向く。

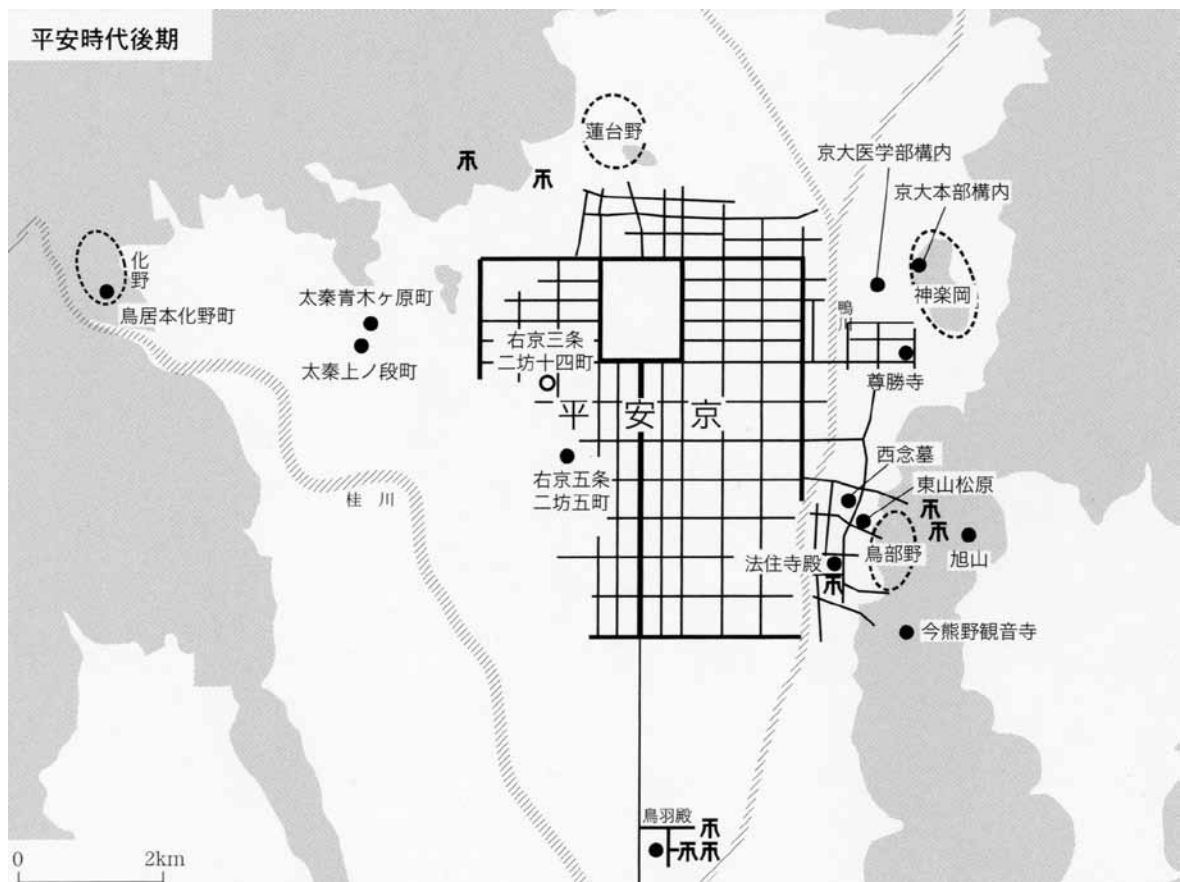


図18 平安時代後期の葬送地 (山田邦和「平安京・京都の葬送空間」『京都都市史の研究』)

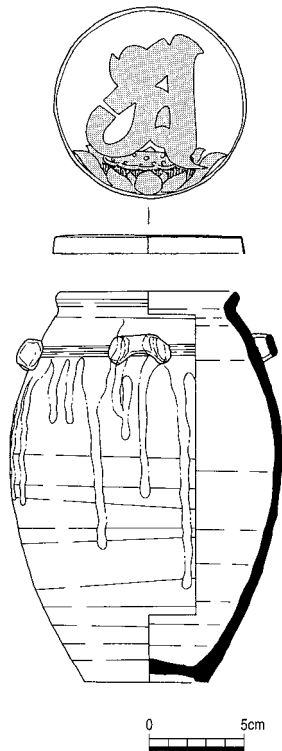


図19 化野出土蔵骨器実測図
(1:4) 蓋は金銅製

葬送地の関連でいえば、石塔の出土が特筆できる。石塔は御土居の盛土から出土したため混入品であるが、蓮台野に深く関係する遺物といえる。14cm四方の角柱石材に梵字（キリーク：阿弥陀如来）が陽刻された笠塔婆であると考えられる。梵字は非常に丁寧に表現されており、陽刻に加工していることから、金工品を模した可能性が考えられる。梵字の入った金工品例としては、化野墳墓群から出土した金銅製蓋付き蔵骨器があり、蓋の表に梵字（キリーク：阿弥陀如来）が浮き彫りされている⁵⁾（図19）。石塔（笠塔婆）の石材は東讃岐原産の凝灰岩で、数ある採石場のうち、火山地域から産出した火山石と呼ばれる石材である。特徴は白色ガラス質の基質に黒色ガラス粒子や軽石を含み、非常に白い。讃岐産の凝灰岩は、古代より古墳の石棺材に利用されており、平安時代には大極殿や鳥羽離宮勝光明院の基壇化粧として搬入されたことが『三大実録』や『長秋記』の記載に見え、発掘調査でも東讃岐産の凝灰岩が出土している⁶⁾。このように、讃岐産の凝灰岩は大和二上山産の凝灰岩とともに特別な石材であったといえる。京域に存在するものの中で、基壇以外に利用されたもの

としては、鳥羽離宮の成菩提院跡で江戸時代に不時発見された釈迦三尊石仏があるが、石塔（笠塔婆）は初例である。以上のように、京域に持ち込まれる讃岐産凝灰岩は、含有物の特徴から火山西教寺奥院（香川県さぬき市大川町）や相地（さぬき市津田町）の石切場から運搬されたものと考えられる。その関係性を示すものとして、『安楽寿院古文書』によると、大川町は鳥羽離宮の安楽寿院領であったことが関係していると考えられる⁷⁾。

（２）御土居の構築方法について

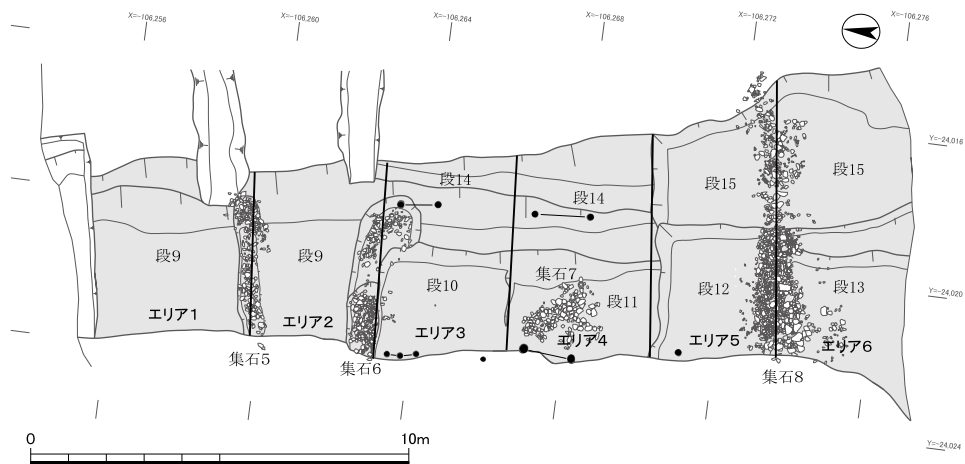
今回の調査の成果の一つに盛土の構築方法の一部が復元できたことがあげられる。南北方向に延びる鷹峯台地の西側縁辺にみられる河岸段丘の傾斜を利用して、土塁の西端のラインを設定しているが、台地は南東方向に反れていくため、南にいくにつれて盛土が多く必要になったと考えられる。シルト主体の盛土を構築し、さらに砂礫主体の盛土で土塁の形状を成形している。盛土は従来考えられているように、すべて土塁側から堀側にむけて盛土していると考えられる⁸⁾。また、土塁を築く際に核となる小山を先行して設けて空間を充填する構築方法は、シルト主体の盛土部分では、黒色～褐灰色シルトが丘陵地形の先端（西端）に見られ、黄褐色シルトと交互に積み上げられている、という状況を観察できた。しかし、砂礫主体の盛土部分では明瞭に観察することはできなかった。その代わり砂礫主体の盛土部分を土塁を縦断する方向で観察すると、礫を意図的にまとめている箇所を確認することができた。平面的にみると、シルト主体の盛土の上面に一定間隔で東西方向の集石が認められる。

砂礫主体の盛土を除去することによって現れる段状の地形は、さらに集石によって区画される。集石より上層の砂礫主体の盛土の土量を算出した結果が図20である。

塗りつぶされている箇所が対象で、土塁の上部へと続く東側は、ほぼ同一標高で削平を受けている。エリア1は北側の境界が調査区外になるため、比較対象としては不適切である。同様にエリア6も南端が不明である。エリア1・6を除いて表をみると、それぞれのエリアの幅が3.1～3.6m程度となり、集石より上の化粧土までの土量は1.4～20.5m³となる。エリア2を構成する段9は、ほとんどが化粧土の土量であるため数値が小さい。

段や集石で分けられるエリアは、等間隔を意識しているといってもよく、構築単位を表すものと考えられる。盛土の方向は東（土塁）側から西（堀）側に向いており、さらに地形の傾斜も加わることから、北東から南西方向も認められる。また、エリアごとの特徴があり、エリア1・2は砂礫の盛土がほとんどなく、エリア3・4は段の東側法面付近には盛土時の土留めに使用された可能性がある杭穴が確認できる。エリア5にも杭穴が1基確認できるが、エリア3・4は下段と上段の2段に杭穴列が認められる。エリア4は段11に人頭大の礫を平面的に集めており、列になっていない。エリア5とエリア6の境界に積み上げられる集石8は、非常に多くの礫を集石しており、他との違いがある。主に砂礫主体の盛土の量は、自然地形の制約から南にいくにつれて徐々に増えている。以上のことから、今回検出した土塁盛土のうち上層の砂礫主体の盛土は、一定単位ごとに構築をしていることが判明した。

ただし、この集石によって区画を作る構築方法が御土居全体の構築方法とはいえない。過去の土塁の調査例をみると、小山を核として盛土を大きくする工法（図11－調査3・18）や砂礫層を盛



砂礫主体の盛土土量表

	エリア1	エリア2	エリア3	エリア4	エリア5	エリア6
南北幅	(4.20m)	3.09m	3.36m	3.68m	3.20m	(3.60m)
土量	(1.6m³)	1.4m³	11.3m³	14.1m³	20.5m³	(28.0m³)
構成	段9	段9	段10・14 杭穴列	段11・14 杭穴列	段12・15	段13・15
境界	集石5		集石6	段差	段差	集石8

図20 北区北半砂礫主体の盛土土量比較図（1：200）

土するために部分的な版築がみられる工法（図11－調査17）、平安時代の洪水対策用に築かれた堤が御土居に取り込まれた例（図11－調査18）が確認されている。いずれも平地で築造された例であるが、今回の調査例を合わせて考察すると、地形に適した工法が選択された状況がうかがえる。

（３）御土居に設けられた暗渠

南区南端で検出した溝３は、土塁構築後に設置された暗渠であった。幅1.55mの掘形の中央に幅0.4mの石詰暗渠が設けられている。暗渠は、西側の堀に向かって傾斜しており、こぶし大の礫を溝状の掘形に充填している（図21）。溝３の東側延長線上に設定した拡張区では、同じ幅の掘形を検出したが、石詰暗渠は存在せず、東側は開渠であり、溝３の取水口であると考えられる。このことから、現在の道路との土地境界が土塁の東端を踏襲していると考えられる。土塁内側の水は、西側（堀側）に傾斜する石詰暗渠を通して堀に排水される構造であったと考えられる。溝の傾斜角度は3.1%である。全容が明らかでないため正確な数値とはいえないが、北野天満宮で検出した石組製の暗渠の傾斜角度は3.9%と近似している。

溝３からは、前時代の混入品と考えられる遺物しか出土していないため、構築時期は不明であるが、その状況から御土居の土塁構築直後と考えられる。

註

- 1) 内野、北野、平野、上野、紫野、蓮台野、ノ野の七野。蓮台野周辺には柏野（蓮台寺の南）や長坂野（紙屋川右岸、左大文字山東麓）などもあった。「蓮台野（北区）」『京都市の地名 日本歴史地名大系 第27巻』 平凡社 1979年
- 2) 山田邦和「平安京・京都の葬送空間」『京都都市史の研究』 吉川弘文館 2009年
- 3) 『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1990年
- 4) 「平安京右京五条二坊」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』 京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 5) 小檜山一良 「史跡名勝嵐山」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6) 遠藤亮「附載 古代「壇上積基壇」に使われた讃岐の凝灰岩 岡山市賞田廃寺基壇石材の採石地」『史跡 賞田廃寺跡』 岡山市教育委員会 2005年
- 7) 6) に同じ
- 8) 丸川義広「御土居跡の発掘調査とその成果」『日本史研究』420号 1997年、
鈴木久史「御土居跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』 京都市文化市民局 2015年

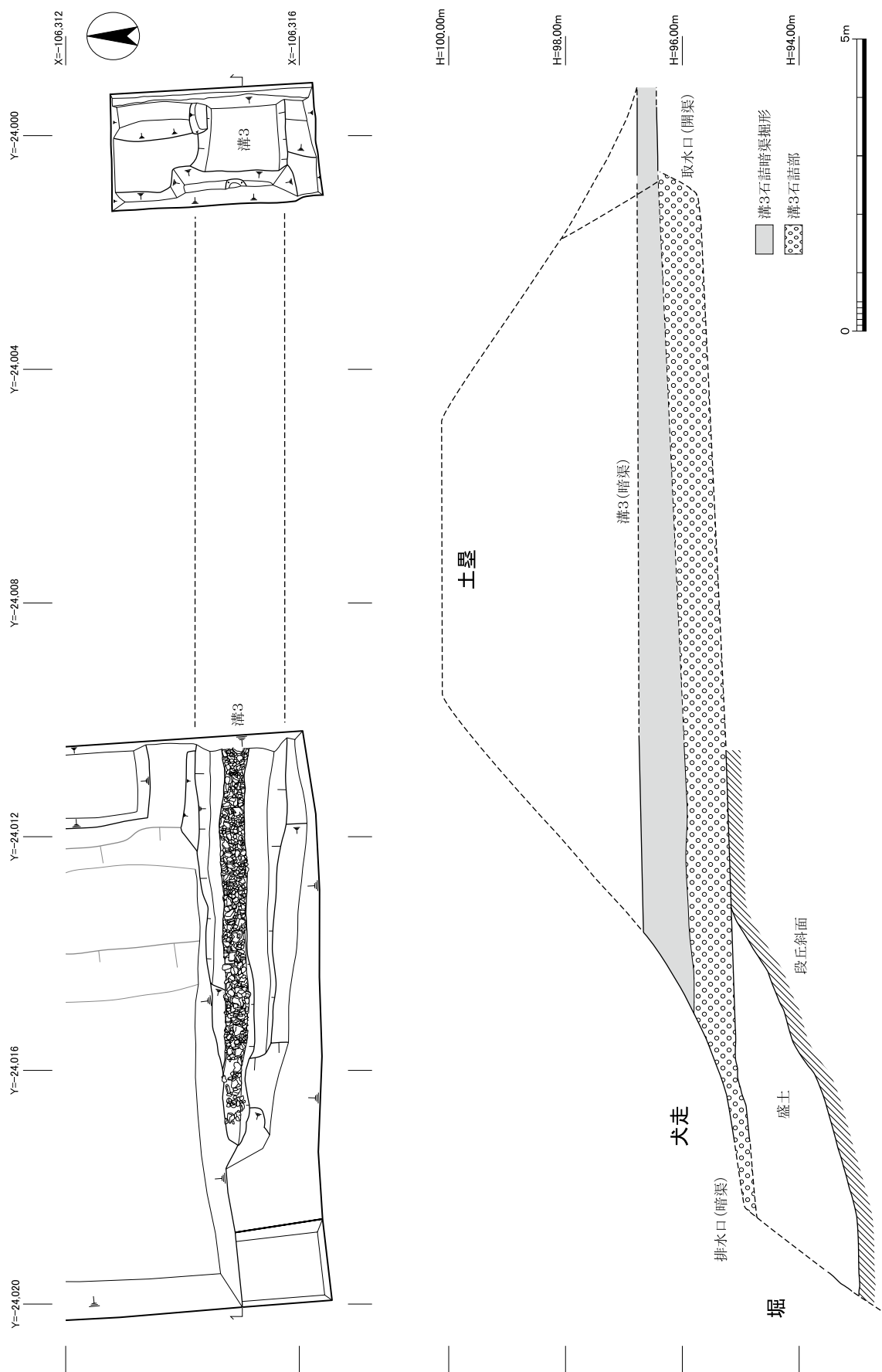


図21 溝3断面模式図 (1 : 100)

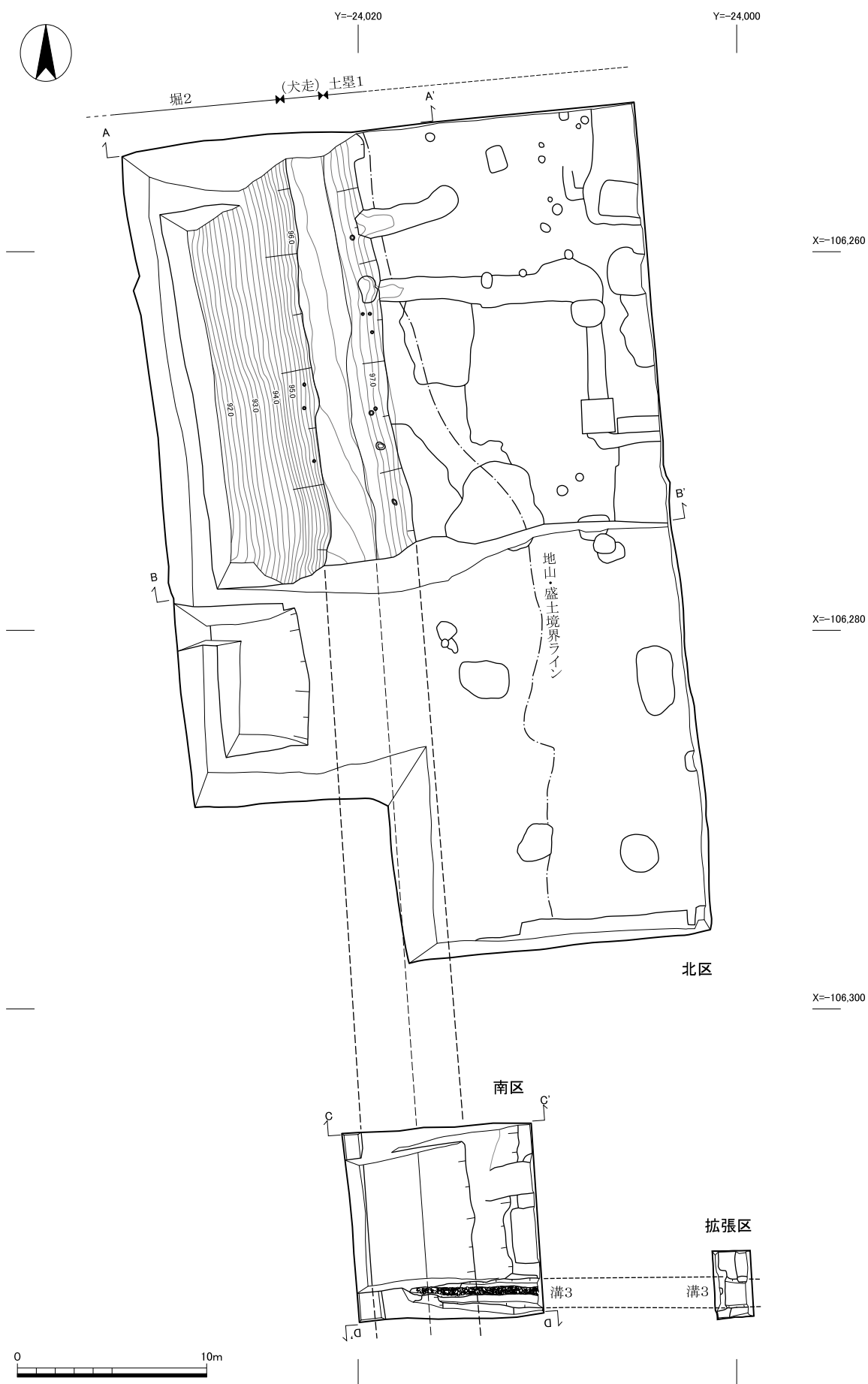
図 版

1 北区北壁 (図版 4 に対応)



2 北区中央壁 (図版 5 に対応)





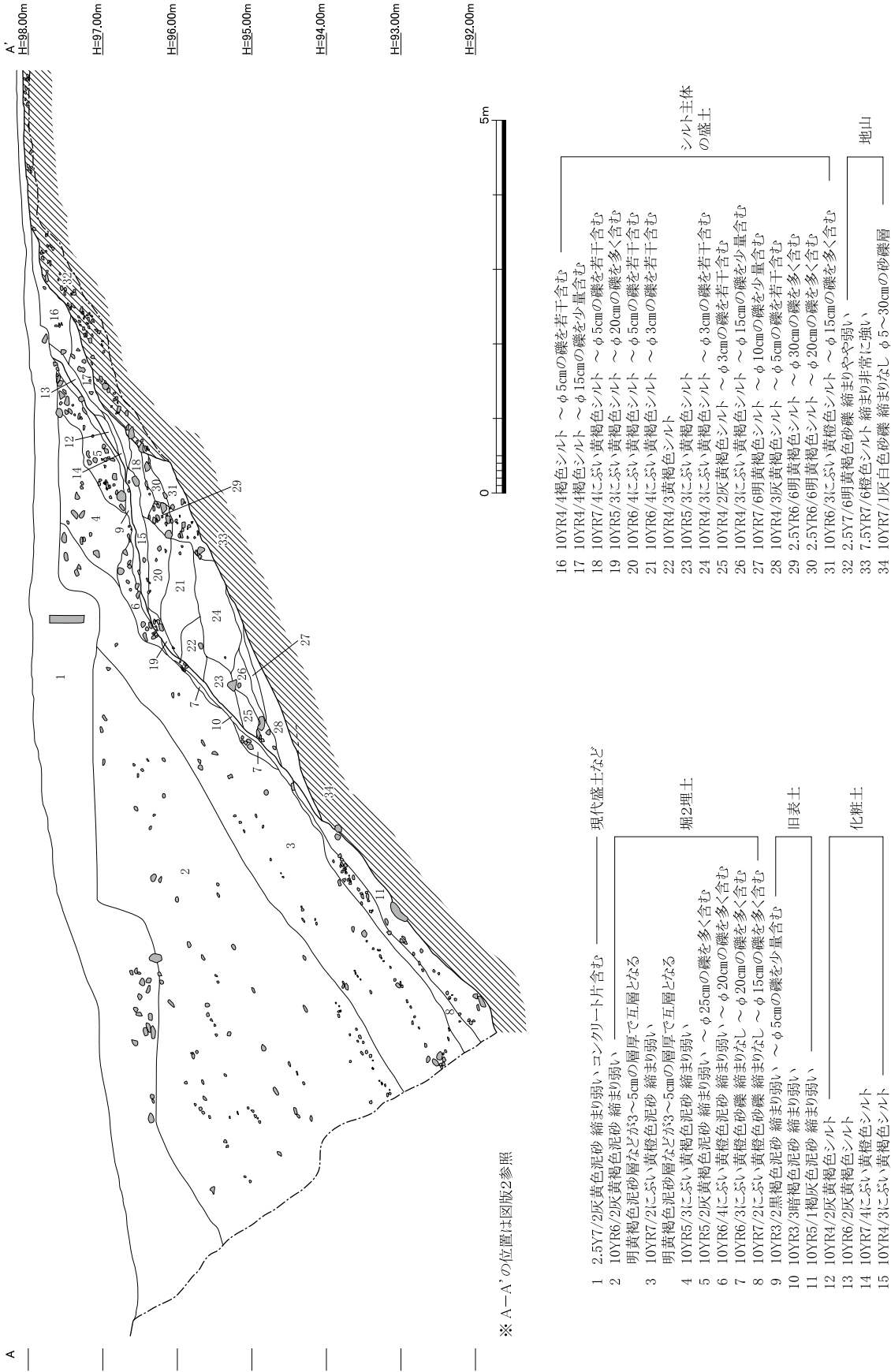
第1面平面図 (1 : 300)

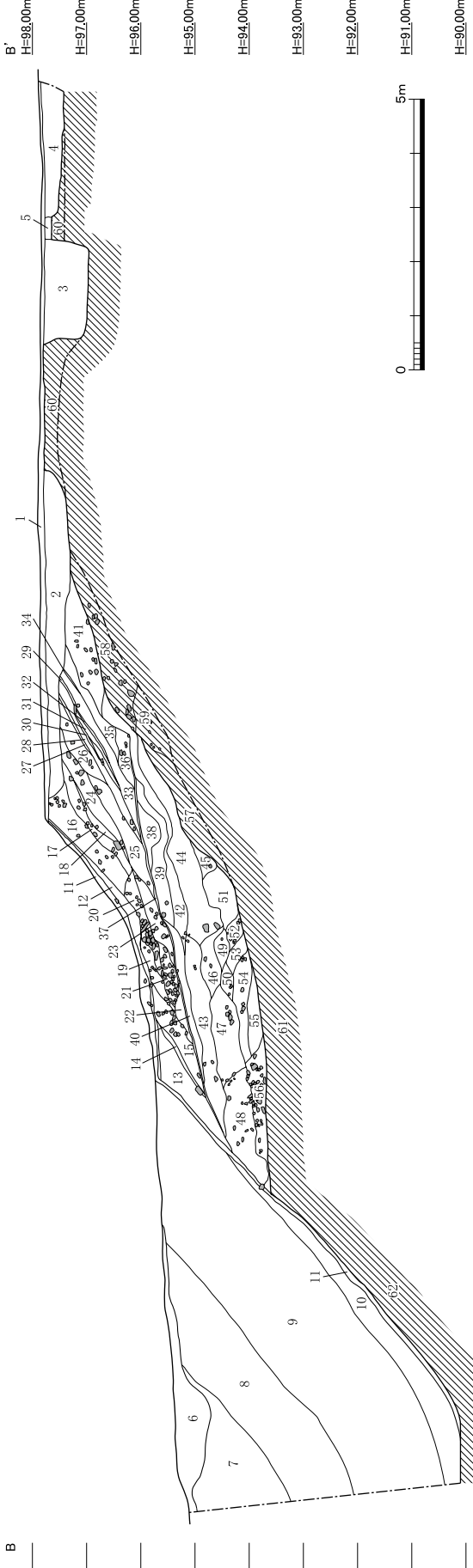


第2面平面図 (1 : 300)

北区北壁断面図（1：80）

図版 4
遺構





北区中央壁断面図（1：120）

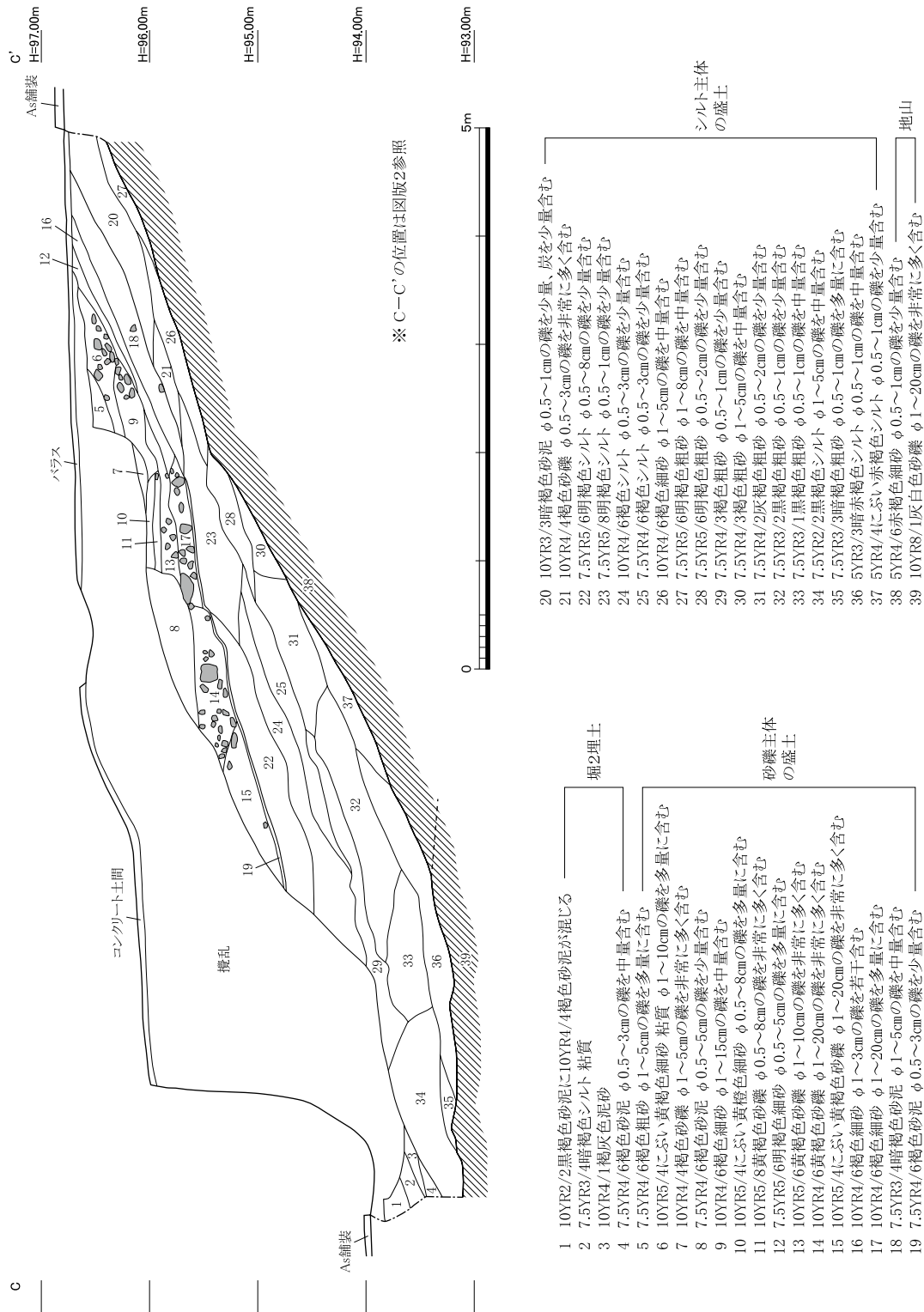
※ B—B' の位置は図版2参照

- | | |
|---------------------------------|------|
| 1 10YR7/1灰白色砂利 | 現代盛土 |
| 2 2.5YR4/1褐灰色泥砂 締まり弱い | など |
| 3 10YR4/1褐灰色砂泥 締まり弱い | |
| 4 10YR8/1灰白色コンクリート | |
| 5 10YR3/1黒褐色泥砂 締まり弱い | |
| 6 2.5Y4/1黄褐色泥砂 締まり強い | |
| 7 10YR7/6明黄褐色泥砂 締まり強い | |
| 8 10YR6/4～10YR7/3にぶい黄褐色泥砂 締まりなし | |
| 9 10YR6/3～10YR6/4にぶい黄褐色泥砂 締まりなし | 堀2埋土 |
| 10 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 締まりなし | |
| 11 10YR6/1褐灰色泥砂 締まりややあり | 旧表土 |
| 12 10YR5/3にぶい黄褐色シルト 締まりややあり | 化粧土 |

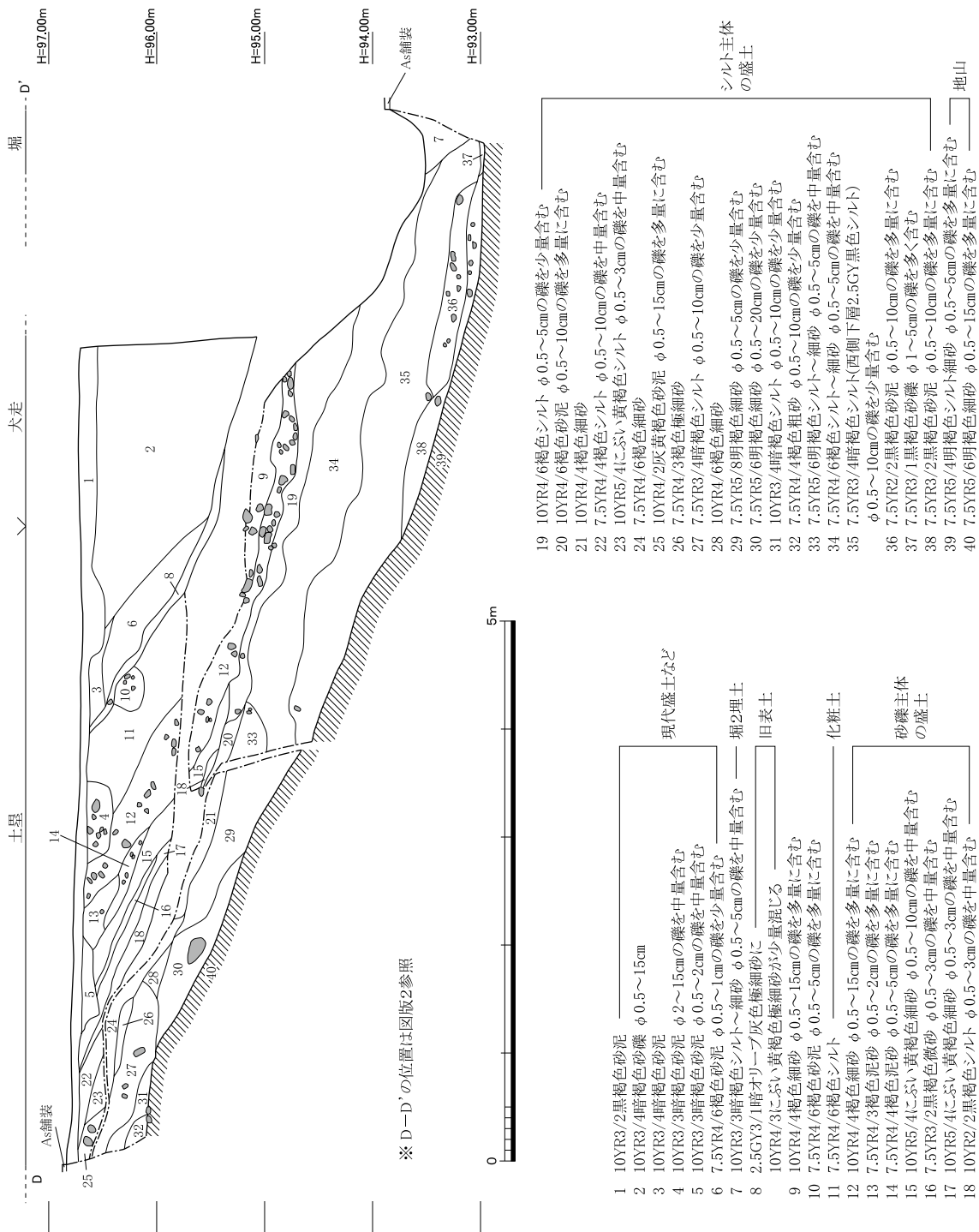
- | | |
|---|---------|
| 13 10YR7/3にぶい黄褐色泥砂 締まりややあり φ3～20cmの礫を多く含む | 砂礫主体の盛土 |
| 14 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 締まり弱い、φ5～10cmの礫を多く含む | |
| 15 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 締まり弱い | |
| 16 7.5R5/4にぶい褐色泥砂 締まりややあり φ5～10cmの礫を多く含む | |
| 17 10YR7/4にぶい黄褐色泥砂 締まりややあり φ3～15cmの礫を少量含む | |
| 18 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 締まりややあり φ5～10cmの礫を多く含む | |
| 19 10YR6/2灰黄褐色砂泥 締まりややあり φ3～15cmの礫を多く含む | |
| 20 10YR6/2灰黄褐色砂泥 締まりなし φ5～30cmの礫を非常に多く含む | |
| 21 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥 締まり弱い、φ5～15cmの礫を多く含む | |
| 22 10YR7/3にぶい黄褐色泥砂 締まりややあり φ1～5cmの礫を若干含む | |
| 23 10YR6/4にぶい黄褐色泥砂 締まりややあり φ3～10cmの礫を少量含む | |
| 24 10YR6/3にぶい黄褐色泥砂 締まりややあり φ3～10cmの礫を少量含む | |
| 25 10YR7/4にぶい黄褐色泥砂 締まりややあり φ1～5cmの礫を少量含む | |
| 26 10YR7/2にぶい黄褐色泥砂 締まりややあり φ3～15cmの礫を多く含む | |
| 27 10YR3/1黒褐色泥砂 締まり弱い、φ1～3cmの礫を若干含む | |
| 28 10YR6/3にぶい黄褐色泥砂 締まり弱い、φ1～3cmの礫を若干含む | |
| 29 10YR3/1黒褐色泥砂 締まり弱い、φ1～3cmの礫を若干含む | |
| 30 10YR6/3にぶい黄褐色泥砂 締まり弱い、φ1～3cmの礫を若干含む | |
| 31 10YR7/4にぶい黄褐色泥砂 締まり弱い、φ1～3cmの礫を若干含む | |
| 32 10YR3/1黒褐色泥砂 締まり弱い、φ1～3cmの礫を若干含む | |
| 33 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 締まり弱い、φ1～5cmの礫を少量含む | |
| 34 10YR3/1黒褐色泥砂 締まり弱い、φ1～3cmの礫を若干含む | |
| 35 10YR3/4暗褐色泥砂 締まり弱い、φ1～5cmの礫を少量含む | |
| 36 10YR3/3暗褐色泥砂 締まり弱い、φ3～15cmの礫を多く含む | |
| 37 10YR5/1褐灰色泥砂 締まりややあり 下に鉄分沈着 | |

- | | |
|--|----------|
| 38 7.5YR6/8橙色シルト 締まり強い | シルト主体の盛土 |
| 39 7.5YR4/1褐灰色シルト 締まりやや強い | |
| 40 10YR7/4にぶい黄褐色シルト 締まりやや強い | |
| 41 7.5YR5/6明褐色シルト 締まり強い、φ3～10cmの礫を少量含む | |
| 42 7.5YR6/6褐色シルト 締まり強い | |
| 43 7.5YR6/6褐色シルト 締まり強い、φ1～3cmの礫を少量含む | |
| 44 7.5YR5/1褐灰色シルト 締まり強い、φ5～10cmの礫を多く含む | |
| 45 7.5YR6/1褐灰色シルト 締まり強い、φ1～3cmの礫を少量含む | |
| 46 7.5YR3/1黒褐色シルト 締まりやや弱い、φ3～20cmの礫を少量含む | |
| 47 7.5YR2/1黒褐色シルト 締まりやや強い、φ3～15cmの礫を多く含む | |
| 48 7.5YR6/1褐灰色シルト 締まりやや強い、φ1～5cmの礫を多く含む | |
| 49 7.5YR6/6褐色シルト 締まり強い | |
| 50 7.5YR6/4にぶい褐色砂泥 締まり強い、φ1～3cmの礫を少量含む | |
| 51 7.5YR6/3にぶい褐色砂泥 締まり強い、φ1～15cmの礫を多く含む | |
| 52 7.5YR6/3にぶい褐色砂泥 締まり強い、φ1～5cmの礫を多く含む | |
| 53 7.5YR5/2灰褐色砂泥 締まり弱い、φ5～25cmの礫を非常に多く含む | |
| 54 7.5YR7/1明褐色砂泥 締まり強い | |
| 55 7.5YR6/6褐色シルト 締まり強い | |
| 56 7.5YR6/6褐色砂泥 締まり強い、φ1～5cmの礫を多く含む | |
| 57 7.5YR6/6褐色砂泥 締まり強い、φ5～15cmの礫を非常に多く含む | |
| 58 7.5YR6/6褐色砂泥 締まり強い、φ1～5cmの礫を多く含む | |
| 59 7.5YR6/8暗褐色砂泥 締まり非常に強い | |
| 60 7.5YR7/8暗褐色シルト 締まり非常に強い | |
| 61 7.5YR6/6褐色シルト 締まり非常に強い | |
| 62 10YR7/1灰白色砂泥 締まり弱い、φ10～20cmの礫を非常に多く含む | |

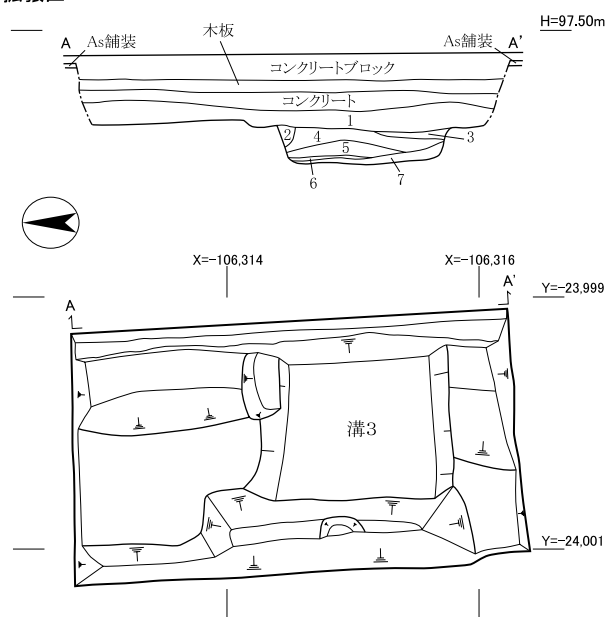
南区北壁断面図（1：60）



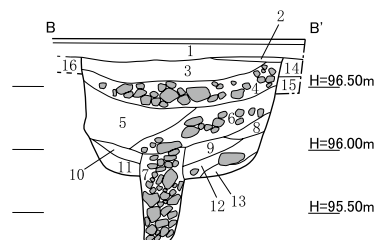
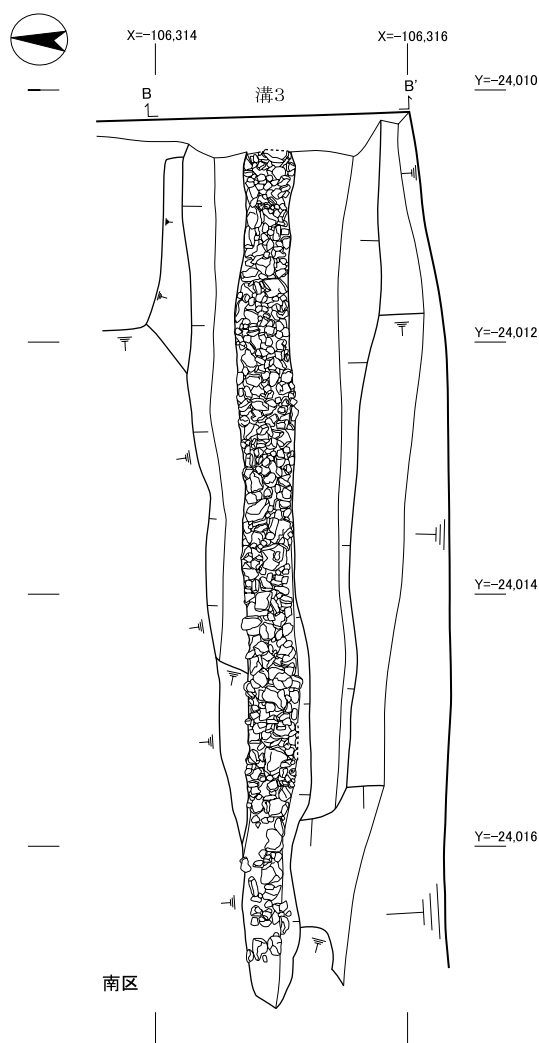
南区南壁断面図（1：60）



拡張区



溝3



- 1 10YR3/2黒褐色砂泥
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色微砂
- 3 10YR3/3暗褐色細砂 φ0.5~2cmの礫を多量に含む
- 4 10YR3/2黒褐色細砂 φ2~20cmの礫を多量に含む
- 5 10YR4/6褐色粗砂 φ1~3cmの礫を多量に含む
- 6 10YR4/6褐色粗砂 φ0.5~15cmの礫を多量に含む
- 7 10YR5/8黄褐色極粗砂 φ2~20cmの礫を多量に含む
- 8 7.5YR4/6褐色粗砂
- 9 7.5YR4/6褐色粗砂 φ0.5~3cmの礫を多量に含む
- 10 7.5YR5/8明褐色粗砂
- 11 7.5YR3/4暗褐色細砂
- 12 7.5YR3/3暗褐色細砂 φ3~20cmの礫を少量含む
- 13 7.5YR4/3褐色微砂 φ0.5~3cmの礫を少量含む
- 14 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ0.5~15cmの礫を多量に含む
- 15 7.5YR3/4暗褐色シルト φ0.5~10cmの礫を少量含む
- 16 10YR4/4暗褐色泥砂

溝3





1 北区北半 第1面全景（南から）



2 北区北半 御土居（堀・土塁）全景（南西から）



1 北区北半 御土居砂礫主体の盛土内集石 5～7 検出状況（北西から）



2 北区北半 御土居砂礫主体の盛土内集石 8 検出状況（西から）



1 北区北半 調査区北壁（南西から）



2 北区北半 第2面全景（北西から）



1 北区南半 第1面全景（北から）



2 北区南半 第2面全景（北から）



1 北区南半 中央断面（南西から）



2 北区南半 墓4（北から）



3 北区南半 墓4釘出土状況（南西から）



1 南区 第1面全景（北から）



2 南区 溝3（南西から）



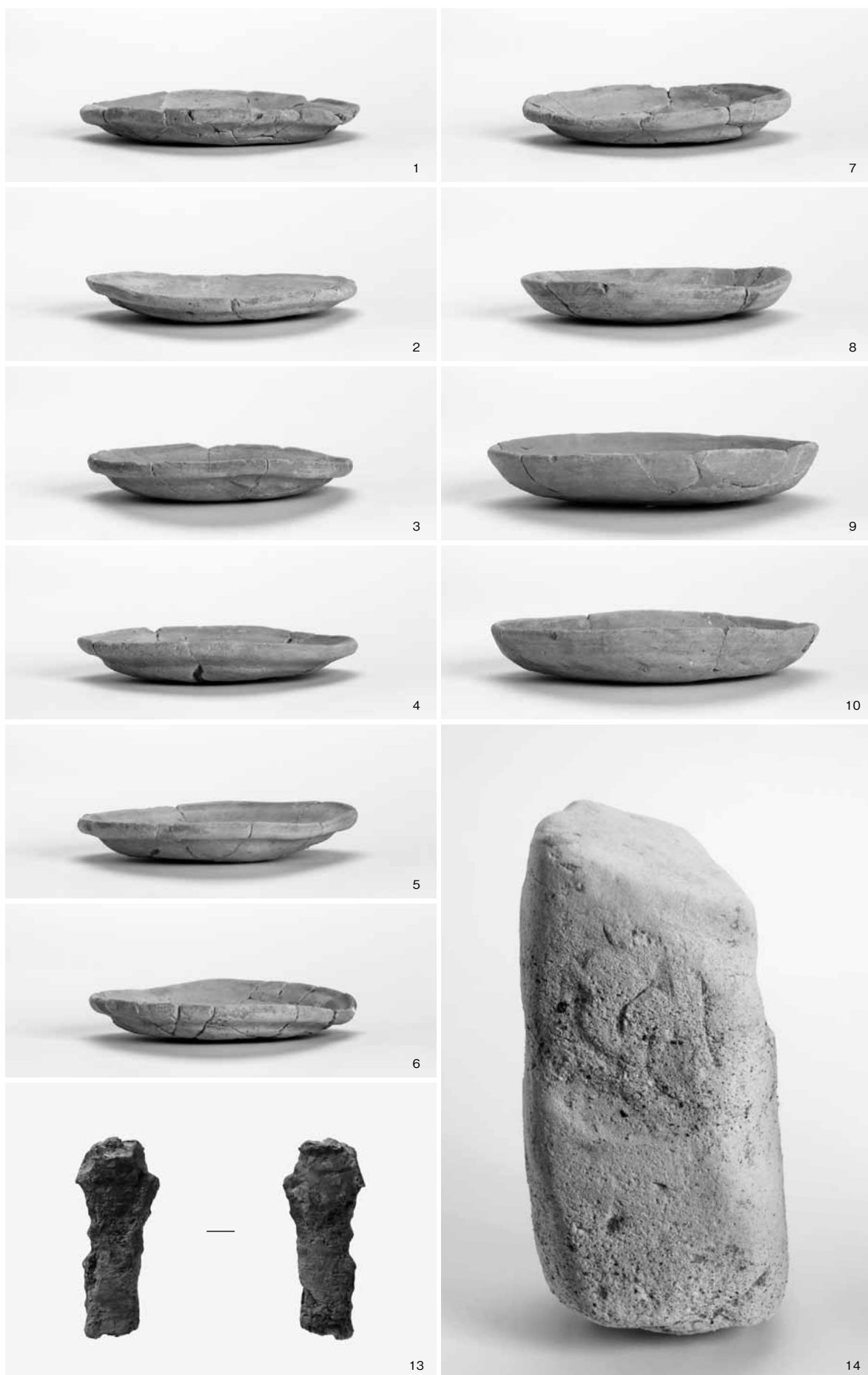
3 南区 溝3断面（南西から）



1 南区 第2面全景（西から）



2 南区拡張区 溝3（西から）



墓4出土土器・鉄釘、シルト主体の盛土出土石塔

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おどいあと							
書 名	御土居跡							
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2 0 1 6 - 1 1							
編 著 者 名	持田 透・関広尚世							
編 集 機 関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発 行 年 月 日	西暦2017年 3 月31日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
お ど い あと 御土居跡	きょうとしきたくむらさきの 京都市北区紫野 きたはなのぼうちょう 北花ノ坊町 31番地 他	26100	149	35度 02分 31秒	135度 44分 14秒	2016年 9 月 1 日～2016 年12月 5 日	1,161㎡	市営住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
御土居跡	土塁跡	安土桃山時代 ～江戸時代	御土居(堀・土塁)、 石詰暗渠		なし		御土居の堀から土 塁基底部までを検 出した。また土塁 を横断する石詰暗 渠を検出した。 御土居盛土の下か ら平安時代の墓を 検出した。 御土居盛土内から 梵字が陽刻された 石塔が出土した。	
		平安時代後期	墓		土師器、鉄釘、石塔			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-11

御 土 居 跡

発行日 2017年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961